

R40.20

* Nota, Vol. 7, 1945
(essays & poems)

67/14
C

Extra Copy

*Take like
send to
Corkberry*

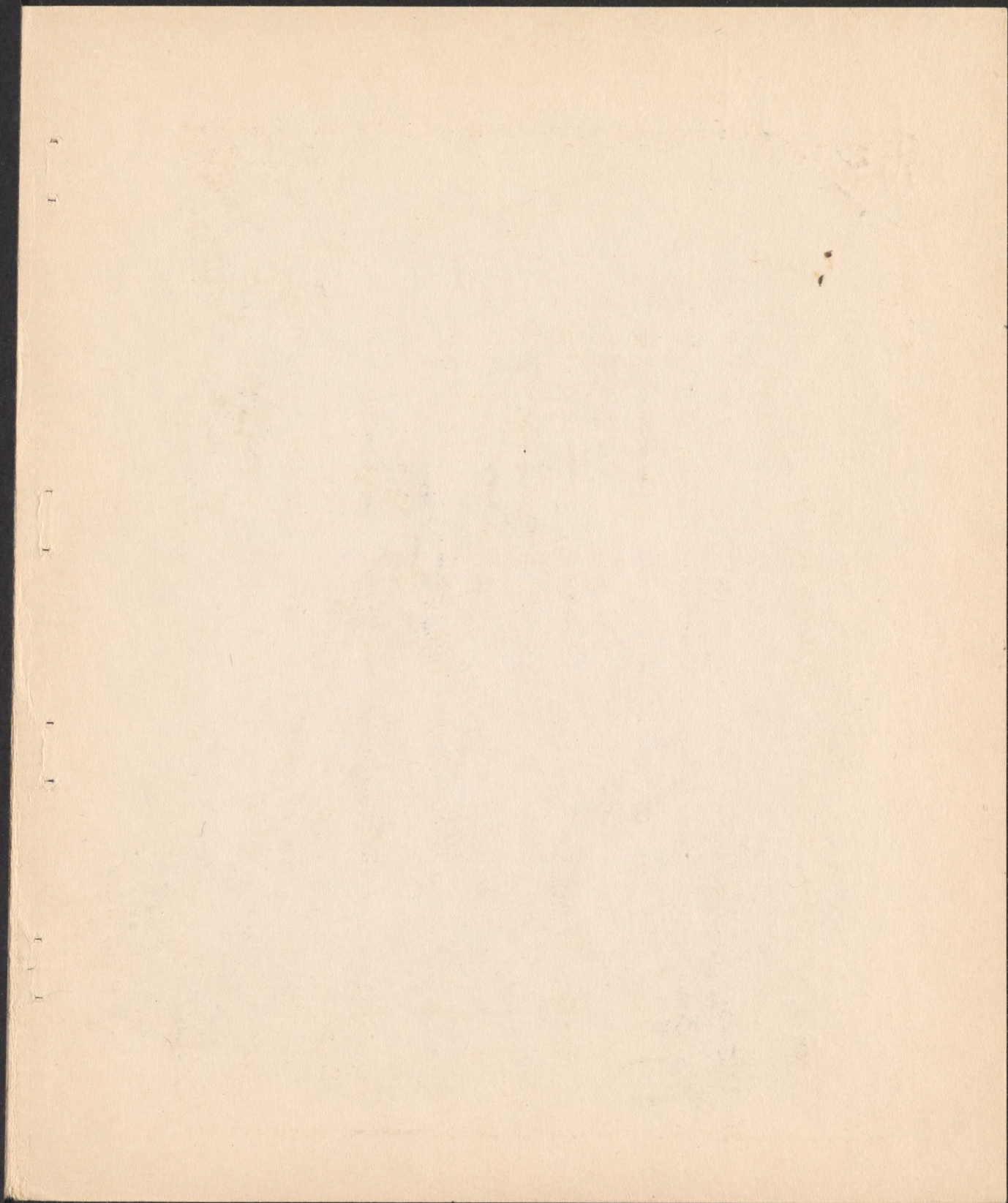
怒心

濤

號

七





言 頭 卷

「すべてのものはなほべく肯定するのが本當である。否定する時にても、何物かを肯定する爲の否定でなくてはならぬ。否定せんが爲の否定は外道である。一つの自殺である。空虚である。」と云ふ倉田百三氏の言葉は、卑近な我々の環境に深い眞理として存任し、宗教的尊嚴さを覺えしめる。

戦争に因て生じた我々の環境に存在する善も、美も、悪も、天等を我々自身が生んだものとして肯定しなければならぬ。すべてを肯定する事のみに於て眞理の追究が可能である。

我々の社会に生じた悪を否定する時にても、否定の根底に現實を凝視する大らかさを見ることが必要である。

現實を追究することなくして、社会に起つた一現象を單に道德的・倫理的立場から否定すること夫れ自体は、現實を否定せんとするものであり、現實の中に住む自己を否定せんとするものでもある。

我々が感じてゐる現在の環境の不健全な雰圍氣を追ひ拂ふ爲には、環境の持つ空虚さをも素直に肯定してみることである。

III ユダヤ民族主義 III

『シオン議定書』

池本 覺

「若し二十人の哲学者が太陽があるが故に晝ありとの説を否定したならば、全国民は其の意見を採用したであらう」とフオントネルが言つたのは既に古い話であるが、天下多数の識者が現世界の紛糾はヴェルサイユ條約の不首^尻から来ると主張してゐる今日、この論を翻すことは人力の及ぶ所ではない。依つて第二次の世界大戦はヴェルサイユ條約打倒の肉弾戦であり、同時に待たざる国が英佛米に対する復讐戦でもある。

ところで支那事変と第二次世界大戦の底を流れてゐるものが如何なるものであるかと言ふことに就いては、漸くこの頃に至つて実は英佛露と戦つてゐるのであり、然し、その英国佛国を動かしてゐるものが實際に何であるかと言へば、純粹の英国、純粹の佛国等ではなくして、即ちえを操縦するフリーメーソン国際秘密結社の策動によるものであり、更に、そのフリーメーソンなる国際秘密結社の中

心をなすものは何であるかと言へば、意外にもユダヤ民族であるといふ驚くべき事実が理解されるに至つてきた。だが、これは唯さうしたものかといふ様な單純な意義しか持たぬ事象ではなくして、今後如何にこの國際紛擾の事変を解決に導くべきか、或は如何にして恒久平和を樹立すべきかといふ問題は、この根本を究明しない限り種々なる困難に遭遇せざるを得ない重大性を持つものと思ふのである。

この秋に当り、英佛米の支配階級を支配しつつあるユダヤ民族の民族主義信條を檢討し「シオン議定書」を再考察するものもあながち無駄ではあるまい。

ロンドン、タイムスの元主筆ビッカム・スチードは「ユダヤの動きを見ずして外交や政治、經濟を判斷することは非常な冒險だ」と言つた。日本でもユダヤ問題の重大性を相當古くから叫ばれて来たのであるが、問題の内容が余り広汎に亘るのと複雑性を帯びてゐるので、専門のユダヤ人問題研究家でない一般人士の耳目にはこの内容に於いた重大性を認識する機会が少過ぎるのであらうか、肯定し得ないとする者のあるを遺憾とする。

實際に考察するに、ユダヤ民族主義の問題は非常に古い歴史を持つ問題であつて、彼等は自己の歴史を五千七百年と稱し、時局的にそれ程舊い歴史を持つものだと思つてゐるのであるが、空間的にロドイツ一國の問題たるに止まらず、實に世界の全部にわたつての重大問題だと言はなければならぬのである。

支那事変に於て日本が痛切にユダヤ問題に当面することになつたのは重慶政權を動かしてゐるのが実は英國のユダヤ財閥であると言ふことを知つてからである。しかもこの事変に対する欧米の輿論を極度に排日的ならしめてゐるのは、独伊を除く欧米の新聞通信の悉くがユダヤ人の経営にあり、更に共產主義運動が實際に於て、ユダヤ運動の一つの現れであることが暴露された結果、動乱事変の解決整備にしても、「ユダヤの動き」を除外しては到底考へられぬ今日の実情とひつてゐるのである。

そもくユダヤ問題の一大要因はユダヤ国の存在といふ小事である。米国ではこれを「地底政府」の別稱をなしてゐるが、いづれもユダヤ教を信條としてかたく團結し、進んでユダヤ人の支配下に置かんとする所謂メシヤ觀念による團結をなし、主としてヘブライ語を以て連結し、殊に相互扶助が行はれてゐることは、最も特異な点で重視さるべきことである。

ユダヤ民族はアラビヤ沙漠北部の豐饒な地方に發生せるセミット族を原種族とし、アモレアン民族、ヒツチー族と混血融合しイスラヘル民族を形成した遊牧の民である。今日彼等が世界を跨にかけ、徹底したインターナショナルリストであり一國に固定することなく何処へでも流れ歩く流民であるといふことを證明するので其の當時からの生活状態が後々までも波動の潜在意識となりこの民族の特質を形成してゐるのである。今全世界に亘るユダヤ人總計一千五百四十万人の分布状

態を見ると、米國四百八万余（は米國を見る上に非常に大事なことである）ポーランド三百七十万、露國二百九十七万、ルーマニア百万、ドイツの六十万（是はヒットラーの國內政策により國外に追放されたのであるが、全部放逐されたわけではなく、最も有害なる分子だけが追放されたのであつて大部分は今も尚ドイツに居住してゐる。）英國三十万、佛國の二十万といふ状態にあり、伊太利に五万近く分布してゐる筈である。東洋に於ける分布状態は信憑すべき統計なく日滿支三國の通計で約一萬三千人と算定されてゐる。

一体ユダヤ人はユダヤ教に対しては絶体狂信的である。このユダヤ教がユダヤ問題の核心をなすものであつて、ユダヤ教を離れてユダヤ問題はなないのである。ユダヤ民族の生命は一にこのユダヤ教にある。千八百年もの昔から各國を流浪し分布せられたる少数民族でありながら、何故に彼等は他民族に同化せられてしまはなかつたかと言ふことは、このユダヤ教の本質にあるのである。

ユダヤ教とは一言にいへば民族宗教であつて、ユダヤ民族のみが神に選ばれたる民族であり、他民族はその支配下に支配されるのだといふ信條を堅持し、更に道德正義はユダヤ人にのみ適用されるもので、非ユダヤ人に対しては、凡ゆる嘘言、權謀、慘虐が神より許されてゐるといふ厄介な信念を持つてゐるのである。ユダヤ問題の複雑性は此処から出發するのであつて「シオン賢者の秘密」と題される「シオン議定書」の根本も、このユダヤ教主義から出發してゐるのである。

一体ユダヤ民族の如きセム人種は宗教に狂信的なもので、このユダヤ教に對する狂信からユダヤ人の特異性が生れ、非ユダヤ人との非妥協性があるのである。自ら支配力なしと信ずる間は妥協を粧ふも決して妥協性を發揮するのではない。これは実に悲しむべき信念で、大戰後に於ける独、伊、露、ハンガリー、ブルガリヤ諸国の実例は、これを端的に證明し、而もそれが反動を誘致し、排猶運動の起れることと今日の実情が実證して余りあるのである。

独善的で、排他的なユダヤの狂信が生き、この非妥協的な世界征服觀念が種々複雑なる行動を起す固は世界の民族はユダヤ民族との争鬭を續けて行くことになるのだ。所謂人民戦線、共產運動、自由主義、國際主義に隠れたユダヤ運動と各民族並に國家戦線との血みどろな戦ひが複雑な形で延長されて行くであらう。而して今や極東及び欧州の中原にはそれが端的に現れて來てゐるのだ。

今、私はこゝに彼等の選民思想、言語風俗に就いて少しく詳細に記述をなしたのであるが、こゝでは論議外のものとして先を急がう。たゞ「シオン議定書」を考察する上に大切なユダヤ教の本質を今一つ記述させて貰はう。彼等はユダヤ教の純粹性を絶体的に自負する。爾余の宗教に於ては一宗一派を立て、対立し、鬭争して、醜態を晒してゐるとなし、ユダヤ教の絶体性を信仰してゐるのである。彼等の經典としては舊約聖書が主なるもので、その他は新約としてタルムードがある。このタルムードと舊約が彼等の經典であり、ユダヤ教の根柢をなすもの

である。舊約誓書は元々モーゼが神から直接啓示を受けて述べたといふことが中心を占めてゐるのに対し、新約は後にキリストによつて説かれたものであつて、根本精神に於ては全く舊約と異なるものである。其處で反ユダヤのキリスト教を撲滅せんが爲に西歴五世紀頃までに多数のユダヤ人僧侶の手に據つて編出された形大なるユダヤ聖典がタルムードなのである。天文学、医学を始め、学問の一切の分野を抱擁してゐるのであるが、目的とする所がキリスト教排撃にあるが故に、他民族を攻撃することに於て痛烈を極めてゐるのである。この世の中の諸民族の中で「人面」と稱し得べきものは独りユダヤ民族のみ、他民族は獸類なりと、故に「他民族の所有するものはユダヤ民族に帰すべきものなり。今より汝等の手に回收すること、何等差支へむし」もう一つ宗教上に就いて記述しなければならぬことは、「イザヤ書」第六十章第五節に「その時汝の心おどろき、あやしめ且つひろらかになるべし、そは、海の富はうつりて汝につき、もろくの国の貨財は汝に來るべければなり」これ財政經濟に於て、ユダヤ人が世界の牛耳をとるといふことを書いたものである。十節には「とつ国は汝の爲に石垣をきづき、彼等の王達は汝に事へん」これは最後の予言で正しく政治的予言である。刻下の実情を想ひ起す時、実に深甚の警戒をなさねばならぬ重大事實である。

「世界大戦とユダヤ人の著者は、フランスのアンドレ・スビールであるが、この著書の中には、その文句を引いて彼等独特の過激さを以て世界大戦の意義をはつき

リさせてゐる。私は此処に世界革命手段としてのジエントイル・フロントを見るのである。元来ユダヤ人は少数民族であるから多数民族を動かして行く場合、自分自ら先頭に立つことは出来ない。彼等はフランス革命以来何時も多民族を先頭に立て、ゐるのだ。他民族第一線主義を立て、常にその背後にゐて糸を引くのだ。フランス革命はその原因は、僧侶の墮落、横暴であつたといふ事實に相違あるまいが、それを然らしめたのはユダヤであるといふのが今日専門家の見方である。さればこの他民族第一線主義を実行する爲には、一つの結社を作り、他民族を先頭に立て、巧に自分を韜晦しなければならぬ。其処に展開されたのが国際秘密結社即ちフリーメイソンなのである。

私は嘗て米国内のユダヤ人を研究の対象に試みた時、かとした機会から「インペリアル・ファシスト」誌を手にし、現政府を圍るユダヤ色彩の濃厚なるに驚いたが、一休米國はフリーメイソンの國であつて、フリーメイソンに逆らつては政治も経済も成立たないことを知つた。ルーズベルト大統領もフリーメイソンの第三十二次階級に屈してゐたのである。

このフリーメイソンを詳細に解剖するには五千九百四十余年の昔から歴史的にひさねばならぬので、こゝでは紙面の都合上割愛するが、彼等は何を目標としてゐるのか、国際秘密結社の目的とその罪惡などは研究して戴きたいと思ふ。即ち總ての帝王政治を破壊して共和政治になして行かうといふのである。英國が今日

でも友愛、慈善、眞實をかゝげてゐるのは現皇帝を始め、チャーチル以下各閣僚貴族等支配階級者が殆どユダヤ人であり、或はユダヤ色彩人であつて伝統的フリーメイソン国家であり、宗教上反逆者の少数者がスコットランドに於て政治的フリーメイソンを掲げ、この三つを標語と爲したからでもある。フランスの寺院学校では自由、平等、博愛の三標語が刻み込まれて明らかなにフランス革命の功績を残してゐると聞くが、その行き方の違ふ点は、標語を見たゞりで既にその動向は分るのであるが、英國のフリーメイソンはエボリエーションを主張し、フランス派は一挙に急角度の回転をしようといふレボリエーションであつて、革命的フリーメイソンはフランスにあつたのである。

この国際秘密結社は、ユダヤ民族の主義より出る意図の実現をはかる爲の一個の機関以外の何物でもないのである。ユダヤ人のエンサイクロペデアを見ると彼等自ら秘密結社の幹部は全部ユダヤ人であると公然と言明し告白してゐる。これ程確實なことはない。ユダヤ民族が彼等の主義目的を達成せんが爲に如何に裏面に躍つてゐることか、それを以てしても瞭然たるであらう。

第一次世界大戦に於ける彼等の動きは既に研究し盡されてゐるから讀者の多くは知悉されてゐようが、この大戦の直接原因となつたフエルジランド二世を犠牲にし、之を以て世界大戦を惹起せしむるといふことは一千九百十二年の五月二十四日、ドイツの秘密結社の會議に於て既に決議され「死の宣告」は二年も前にフ

エルジナンド二世に下つてゐたのである。

要するに世界大戦は秘密結社の手によつて始められたのである。それはユダヤ民族の世界支配の序曲としての世界大戦だったのである。而してその大戦を終熄せしめたのも彼等である。米国の参戦が彼等をして「如何にして戦争を終熄すべきや」といふ議題を考へさせたのである。その結論として各国の主權の上に更に一つの國際的の會議を置き、此処へ各国の代表を集めて議論をなしてあらはれた決意は絶對的に如何なる国も服従するといふ規約を作り、超國家主義になる「國際聯盟」を作り上げたのである。世廟では國際聯盟の創立者は米國大統領のウィルソンであると考えられてゐるが、彼はフリーメーソン結社の一員であつて、当時大統領の看板を下げてゐたので利用されたのである。今日でも尙國際聯盟の石壁には「國際聯盟創立者ウィットロー・ウィルソン君に敬意を表す」と書いて毎日花輪など捧げてゐると聞くが、事實を考へれば、國際秘密結社に敬意を表してゐるだけのことである。

その證據には米國は脱退して聯盟に加入しなかつた。これを見ても判るやうに國際聯盟は明りかにフリーメーソンのものであり、とりも直さずユダヤ民族の不正むる目的達成ために形成されたものであることは明瞭である。

だが纏つて思へば、あの莫大な戦禍を伴ふ世界大戦を起し、更に彼等自身に結末をつけたといふことは、その善悪はともかく、現世紀に於ける彼等ユダヤ民

族の恐るべき大きな脅きであつたといはなければならぬ。

更に筆を進め今一つ明らかにしなければならぬものはユダヤ思想の我々に及ぼせる影響である。デモクラシーの偶像破壊はその実行の現れて、学界方面に於ては頽廃と獵奇とを取文へた軟文学を鼓吹して人心を安逸透惰に導かうとしてゐる。先に日本で喧々囂々と論議された「天皇機奥説」の問題も元を糺せば即ちユダヤ思想の描出したものである。急激な転向では無くして徐々に国家主義の思想を變革して行かうといふ一つの方法がこれである。

軟文学の泰斗とされるイスラエル・ザングウィルを解剖してみても、彼は實に名文家であり、色々の著書もあるが、それらの作品は明らかに共產主義に傾いた思想を藏してゐる。「社会主義も共產主義も結局に於ては同じものであり、この世界の指導者が我々ユダヤ人であるといふことを忘れてはならぬ」と絶叫した有名な丘傾の文学者である。彼等が軟文学を以て健全なるものを毒さうとしたのは人間の頭腦が哲学や宗教や学理により高く或は固くやつて行くのを恐れたからである。

軟文学の用途は極めて複雑であつて一々例證を上ぐるにたへないが、軟文学を非常に流行せしめたのは赤化手段の一方法としてのユダヤ思想の表現である。

次に彼等が世界的に工作してゐる三つの政策がある。それは三つ政策と稱せられる、セックス、スクーリン・スポーツを通しての民心攪乱の政策で、その国の

道德の破壊と、國際主義の昂揚と、ユダヤ人の優秀を誇示することを目的としたものである。

彼等が金權と言論機關を独占する野望を達成し、支配階級の支配掌握をなした今日、映画事業の掌握は当然であつて、今日英米佛の映画経営者にしてユダヤ人でないものはないのである。彼等によつて作り出される映画が何を目的としてゐるかは、映画観賞家が少し考へれば分る處であるが、それは極めて自然に、しかも何人にも気がつかぬやうに、性道德の破壊、ギヤングに対する興味、戦争に対する悲惨感よりの忌避的感情の煽動、ユダヤ人に対する同情が現されてゐる。それら映画に対する青年子女の魅力の素暗らしさは驚くべき程である。我々は深く考へなければならぬ。——目から入るものは耳より入るものに比べると遙かに印象が強いのでこの方法で徐々に人心を刺戟し、道德心を頹弊させてしまふ目的としてゑを行つてゐるといふことを——

又、性道德の破壊に就いては論文に小説に、血ま彼等は懸命に目的達成への手段として勢力を傾けてゐるやうである。フランスの元首相レオン・ブルムの「幸福の結婚」は此の代表的なものであつて、處女の貞操觀念の破壊といふものを尤もらしく新しい道德とし論理づけた處は、彼がユダヤ人であり、社会主義者であり、共產主義者と全く相通じた思想の持主であるだけにリンゼーの「友愛結婚」と同一の行き方である。このブルムの書は嘗て「婦人公論」が録録發表して弁禁とな

となつたものである。此処にえを長々しく論議するのは当を得ないが、我々はこれに對し、ユダヤ人が結婚に對し如何に嚴格むるかを對照として考察しなければならぬ。ユダヤ人は同族の結束、純血の保持上、男性はユダヤ人の女性に非ざれば妻とすべからずとなし、且処女たることを要求するのである。かゝるユダヤ人が他民族に對して性道德の破壊を煽動する意図は、明らかにその国の伝統を破壊する目的であつて、彼等の憲法たる「シオン議定書」に準據するものである。

スポーツにユダヤの意圖の侵入せる意味は複雑なものである。ユダヤ自体の利益を主眼とし明敏に動くユダヤ人は、將來の反ユダヤ、ファッシズムの勃發に備へて、己の味方とする意味に於て、弱小民族をして優秀觀念を持たしめ、強者と弱者との間に意識的、無意識的に摩擦を起さしめんとするユダヤ特有の革命煽動の理論から特に選んでゐるのがスポーツである。

さて本論議の中心ともなる「シオン議定書」に就いて記述を進めて行かう。

この「議定書」はユダヤ問題に就いて凡そ其の片鱗でも窺つた人なら誰でもその存在を知つてゐる筈のものであるし、又、苟もユダヤ人の世界支配に就いて語る場合には、到底逸することの出来ない重要資料の一つである。これは千八百九十七年八月廿九日から三日間スイスのバーゼル市へ全世界から民族復興の熱狂者が集つて開催されたユダヤ賢人会の議事録の摘録であり、廿四回に亘る集會の議事を最後に廿四條の決議にまとめ上げたものである。本議定書はその題目から

すれば、当然シオニズム運動と關係し、当時西歐諸国の癌であつたユダヤ人をパレスチナ或はその他一定の地に集結して、ユダヤ國家を再建する方策を議したものの、如く見えるのであるが、その実はシオニズムとは全く違つたユダヤ人の世界支配を目的とする恐るべき秘密策に外ならぬのである。またこれを單にシオニズム運動の議案であるとすれば、極力その公表を阻んだり、暴力を揮つて出版書を押收したり、千九百二十年五月ロシア革命の後、ロンドンタイムスがえを暴露公表せし時、非ユダヤ人の捏造なりと宣伝するに努めたりする必要が何処にあらうか。

千八百九十六年テオドル・ヘルツルの著書「ユダヤ國」は正面からシオニズム運動を論じ、その周到なユダヤ人理解と、合理的なユダヤ國建設案とにより、單にユダヤ人側の絶讃を博したばかりでなく、非ユダヤ人側の協讃を得た。ヘルツルによると、ユダヤ人は元来アリアン民族の如く他国人中に容易に同化し得ない國民であることは、有史以後數千年の事實であるし、又一方に於てユダヤ人はすべての革命の指導者であり、他方恐るべき國際財力の支配者であるために、ユダヤ人の集る所必ずユダヤ問題が起り、ユダヤ人問題のなほ所にはユダヤ人が新に問題を作り上げる。これが解決はパレスチナにユダヤ國を建設して、非ユダヤ人及びユダヤ自身を現在の不幸より救ふ他に道がないといふのである。ヘルツルのかゝる提案は世界の歡迎を受け、「ユダヤ國」はシオニズムの原據とも目された。

確かにこのシオニズムはユダヤ人の根本意識の一つであり、中心課題の一つであるが、然しこれがその全部ではない。シオニストは爾来声を大きくしてシオニズムを叫んでゐるが、えは代表的にうざる少数者の希望であり、而もえが意味を持つのは、この絶叫の背後にある秘密の諸政策を実現しようとしてゐる点に存するのである。シオニズムはむしろ一つの陷穽であるともいふべく、他民族の注意をこの運動に惹きつけてその背後を見せむいやうにし、世界の政治的権力及財力の支配者たらんとする彼等が、えを名目として、時処を論ぜず、平時、戦時の區別なく会合し得る看板である。ユダヤ人をパレスチナに集める手段の考究を名として世人の疑惑を避け、各国の喜びを喚起しむがう彼等はその背後で大陰謀を畫策してゐたのである。

千九百三年のシオニスト第六回會議で既に世界大戦が予想されて、その推移と結果、或は平和會議で採るべき態度と方針さへも大體決定をみてゐたといふ事實は、今日に於ては最早ユダヤ人問題研究に於ける常識であるが、この一事實のみを考慮しても、ユダヤ人の眞の目標は、局限された一国家の建設にのみあるのではなく、數千年来予言者によつて約束された世界支配を達成することにあることは、ユダヤ人にとつては自明の方針であり、又本能的慾求であるといつても決して過言で口ない。

新國家は勿論全く無駄ではない。それは貧しいユダヤ人を金の重荷とせらぬやうに

するには、丁度好都合の施設ではあるが、然しそれ以上に後になつてから世界ユダヤ人網の中心となり、彼等の世界支配の足場として大いに役立つもののである。欧州諸国は当時まだシオニズム運動のこのやうな巧妙な戦術に迷はされてゐたのである。そして第一回シオニスト会議の「議定書」こそは、このやうな伝統的世界支配計画の背景を負つて、着々約束された国を實現しようとするユダヤ人指導者の大戦術を解く鍵なのである。

この「シオン議定書」が秘密の議事録であることは云々までもいいが、一体如何なる経路を辿つて公表されるに至つたか、主としてベークのドイツ版の序文によれば詳細に述べられるが都合上後の機会として今は割愛する。

たゞ千八百九十七年バーゼル市にシオニスト会議が開かれるといふことが新聞に出た時、時の露国政府は數千年來のユダヤ人及びフリメーソン結社の陰謀を知つてゐた關係上、これに疑念を抱いたものが、ある経路から寫本を収めた。事情は兎も角として「議定書」はセルゲイ・ニルスの露訳で千九百二年に第一版が刊行された。題して「小事中の大事及明らかで國法上の可能としての反基督者」と云ひ初めての公表である。議定書の著者に就いては長く知られなかつた。またえが秘密會議の議事録でありとすれば、著者名の附いてゐないことは別に不思議ではないが、ユダヤ人側からすれば此点が議定書を否定する口実ともなつたのである。彼等が反ユダヤ宣伝著者と宣伝するのだ。然しそれが宣傳的捏造ではなく眞物

であり、何れもユダヤ人の手に在るものであることは、内容を吟味すればたちどころに明らかに在ることであり、ユダヤ人側の駁論も内容分析から出發しない單なる辯駁に過ぎないのである。議定書に述べられた綱領は、米国の自動車王ヘンリー・フォードがその著書「世界のユダヤ人綱」で言つてゐるやうに、宗教上の論調が多分に全体を貫いてゐて、その敘述も激越な煽動的言辭を弄することは少く、寧ろその全体は數世紀以來確認された事實と、長い間の經驗と実績とにより、安定感が支配してゐる。この点から考察するに議定書は數世紀間のユダヤ賢人の總意が統合して出来たものらしく、何人か右の伝統的總意を体得しつゝ、案文したものに違ひないのである。

千九百二十一年パリ発行の「ラ・グイエーユ・フランス」誌上でエル・フリは「議定書の眞證、アハト・ハ・アムとシオニズム」なる論文を書き、議定書の筆者は激烈なシオニスト指導者たるアハド・ハ・アムと本名アスヘル、ギンツベルクであると指摘した。一部の人がそれまでこの議定書の著者を「ユダヤ人の著者テオドル・ヘルツルに擬することをしたが、現今では専らギンツベルク説が有力に支持されてゐる。彼はユダヤ人によく知られてゐる人物であり「ユダヤ百科全書」には二欄を費してその功績を讃へられ、千九百五年の露国革命を始めとして、屢々各国の革命を煽動したのである。

さて、最初露国でベルグ・ニルスの説が現れて以來、独、佛、英、米等の圧

迫を受けながら、出るべきものは何時かは出るのとへ通り「シオン賢者の秘密」も、その出現の当初から創作者の意志を裏切つて数奇な道を辿りつゝ、全世界に伝播されるに至つた。議定書の世界に伝播した系譜を詳細に探究し、その由来の太体と、その眞偽の問題に觸れて行くと、いたづらに膨大なる表が出来るに違ひない。最後の断定は神のみに許された特権であるとしても、この議定書が眞実にユダヤ人の手に成る世界支配の計畫書であることは、何等かの意味に於て、ユダヤ人的國際財源又はユダヤ的コミンテルンの使徒たる者にとつての外は、最早殆ど疑ふ可からざる事實であらう。かくとも最近百五十年の世界歴史を冷靜に繙く者は、凡てがこの畫策のプログラムに従つて行はれてゐることに今更ながら一驚を喫し、又一方、數千年に亘るユダヤ人の陰謀計畫は、世界支配の意欲の結晶たることに想到して竦然たるものを覚えるであらう。

議定書は一人の人間により案文されたとは云へ、その内容は數千年來のユダヤ精神の顯現であつて、その根本精神は遠く舊約聖書タルムード・トーラ等の聖典に淵源を發してゐるものである。今は一々文獻的に考證してゐる必要もないが、更に近世に至るまでに、この議定書に現れた思想先驅者となつたものは、殆どユダヤ人意欲と思想の代表的指導者として議定書に影響を及ぼしてゐるのである。「議定書」の價值はその眞偽にあるのではなく、寧ろその内容にあるとはよく言はれるのであるが、實際、これに恐るべき人間心理の洞察書として、人間の弱點

を遺棄ひく解剖剔抉、精神的、心理的、動物的に根據から出發して、更に思想、經濟、宗教、政治、娛樂等の広汎なる文化範圍に亘つて現代の國家、社會を批判し、而も單なる批判に止まらず、夫々の對應手段を講じて、結局は非ユダヤ人の精神及び國家組織を破壊すると共に、一歩々々世界ユダヤ國の建設に何つて針路を取る處の計畫を表してある。陰險なユダヤ式平和戰法は一方に秘密結社ワリメーソンの如きる世界に網の如く張り周らし、財力と宣傳機關とを一切自己の掌中に握りながら、時には恐怖政治や革命陰謀を自由に勃發せしめ、宣伝に最も敏感で知識階級或は利害にのみ動く政黨を自由に駆使して、各國民をその主權者から分離すると同時に各國民相互の團結力を撲滅して自滅の道を辿らしめやうとするのである。

世界各國民は、このやうなユダヤ人の計畫網に取巻かれ、着々ユダヤ人の世界支配政策を完成に導きつゝある。そしてユダヤ人の第一目標たる西歐のユダヤ化は第一次世界大戰を以て完成を告げ、彼等の國際共產主義と國際資本主義は完全に西歐を屈伏せしめてある。

「シオン議定書」中の第七議定に於ける計畫中、日本、支那、米國の三つの軍隊を使つて、西歐のユダヤ人圧迫に戦ひを挑むといふ大膽な計畫は、最近の世界歴史に於て到る處その象徵的な意味を見出し得るが、然し今や、日米支の三国は、ユダヤ人の眼から見れば、西歐の非ユダヤ人に対して第二次の非ユダヤ人でむけ

ればならない。而も米因は既に完全にユダヤ人の独裁下にあることを考慮すれば、東洋すもは現在及び未來に於けるユダヤ人の目標であらう。なほ支那も又既に英國（資本主義）ソビエツト聯邦（ボルシエヴィズム）等の傀儡として、背後の強圧力に駆り立てられて抗日に走つてゐる。そして背後の強圧力が彼のユダヤ権力であることは余りにも自明な事實である。この事情は英及びソ聯も又米及び佛と同じくユダヤ主權の傀儡たるを知る時一層明白になるのである。日支事變以來、英佛蘇の媚態的交情は、これを背後より操る同一勢力を假定してのみ完全に理解され得る。

日本の聯盟脱退も、暴支膺懲もその根本意義は彼等に対する正義感の神聖なる反撥に他ならぬ。今までのドイツの対英佛米の意義も、侵略的ユダヤ資本主義の横暴を制御し、ユダヤ的自由主義乃至人民戦線を超克して、ユダヤ資本主義乃至ボルシエヴィズムの敵国内應的敗戦主義を清算することであり、ユダヤ的宣伝に躍ることを「進歩的」又は「科学的」と迷信せざる者の態度であつた。

今次の世界動乱も、實際この「シオン議定書」に突聯あるものとらう。これは單に欧米諸國のみに關係するものでなく、日本にも深き關係を有するものである。此の意味に於いて諸賢の研究を切望する。

（未完）



維新の
英傑

坂中龍馬

(四)

龍馬の公議政体論

慶應三年六月十三日、龍馬は後藤象二郎と共に上京した。

慶應三年二月、後藤が土佐の参政として船艦買入れの爲に長崎に下り、龍馬と
会見して意見を交換した際、肝膽相照し、公議政体論に關する八策を共に
の上京となつたのである。

龍馬の目的は彼が兼ねて持論としてゐた公議政に關する八策を前土州藩主で当
時の四賢公の一人として朝廷と幕府との間にあつて勢力を有してゐた山内容堂に
進言し、容堂を通じてえを慶喜公に建白せしめ、武力を用ひずして大政を奉還せ
しめようとするにあつた。一年前例幕の主体たる薩長勢力を巧妙に合体させた彼
は、皇政維新を期して武斷的に立たうとしてゐる薩長の前に、文治派として立上
つたわけである。何故であらうか。其間の事情を少しく明らかにして置かう。

当時幕府にとつては種々の難問題が次から次へ起つてゐた。その一は兵庫南港
の問題であり、今一つは長州の処分に關しての問題であつた。当時この問題を続

つて諸藩の意見は沸騰し、中にも薩藩島津久光等は、幕府が兵庫南港問題を先決問題としたのに対し、長州の処置を寛大にするのが第一だと言つて譲らなかつた。久光等が之を主張する裏面には、当時既に西郷、大久保の諸藩士等が、中岡の紹介で土藩の乾退助、板垣等と会見し、長州のみならず越前、土佐、宇和島の各藩が一体となつて倒幕同盟の約が成立して居り、更にその背後には岩倉三條等の公卿があつて、朝廷との連絡を取り、右の運動が正に堰を切つて流れんとする形勢になつてゐたからである。その状態を放つて置けば幕府と倒幕聯合軍との間に戦火が申かれるのは必定である。さうなれば天下は大動乱に陥り、回天の業を一虧にかくやうな事にならぬとも限らない。

斯うした形勢を察知した龍馬は後藤を促し、乗るか反るかの大政奉還論を下げて、倒幕挙兵の非を唱へ、それによつて薩長の猛威を抑へると共に、自藩が時局の方向から脱落するのを支へようと云ふ意圖を胸に秘めて急遽上洛したのであつた。ところが、後藤と龍馬が上京した時には容堂は前述の兵庫南港の問題で意見の衝突をまし、癒と稱して五月二十七日土佐へ向つて帰国した後だった。斯うした形成にあつても龍馬は少しも落膽しなかつた。先づ朋友の中岡慎太郎に会つて、倒幕も結構であるが、若し薩長が陸軍のみを頼んで幕府の海軍によつて攝海を制扼されたらどうする。これは深く考へねばならぬことだ。だから此際寧ろ先づ正々堂々の議論を以て幕府に大政奉還を迫り、若し幕府が之を容れないうらその時

こそ其火に訴へても遅くはあるまい」と説いたのであつた。

この龍馬の意見には当時挙兵倒幕主義者の黒幕となつて奔走してゐた中岡にしては一應賛成しむいわけには行かひがなかつた。龍馬は中岡を説く一方、後藤をもて例の八策を在京の土藩の重臣達に披露させ、大政奉還を土佐の藩論にしようと努めた。

龍馬立案の八策は、長崎で後藤に示して賛成を得、更に上京の船中に於て兩人が審議したもので、俗に船中八策と稱せられてゐるが内容は次のやうなものである。

- 一、天下の政權を朝廷に奉還せしめ、政令宜しく朝廷より出づべきこと。
- 二、上下の議政局を設け、議員を置き萬機を参賛せしめ、萬機宜しく公議に決すべきこと。
- 三、有材の公卿、諸侯及天下の人材を顧問に備へ、官爵を賜ひ、宜しく従来有名無実の官を除くべきこと。
- 四、外国の交際広く公議を採り、新に至当の規約を立つべきこと。
- 五、古来の律令を折衷し、新に無窮の大典を撰定すべきこと。
- 六、海軍宜しく拡張すべきこと。
- 七、御親兵を置き京都を守護せしむべきこと。
- 八、金銀貨物宜しく外国と兵均の法を設くべきこと。

以上八策は方今天下の形勢を察し、之を宇内万国に徴するに、之を捨てつゝ、他に濟時の急なかるべし。苟もこの政策を斷行せば、皇運を挽回し、万国と並立するも、亦敢て難しとせず。伏て願くは公明正大の道理に基き、一英斷を以て天下と更始一新せん。

大成奉還成る

慶應三年六月二十二日、大政返上の議論は龍馬の機敏で調停斡旋によつて、遂に薩藩を動かすに至り、京都三本木の旗亭に於て、薩土兩藩の盟約が交された。その席上に出席したのは、土藩からは後藤と始の福岡孝悌、寺村五膳、貞辺栄三郎、薩藩からは、小松、西郷、大久保、尚その他に浪士代表として龍馬と中岡が同席した。盟約の内容を示せば次の如きものであつた。

- 一、主権を匡正し、万世万国に互に恥ぢず、是れ第一義。
- 一、王政復古は論じし、宜しく宇内の形勢を察し、参酌協正すべし。
- 一、国に二帝なし、政刑唯一君に歸すべし。
- 一、將藏に居て政柄を執る、是れ天地固有るべからざるの理なり。宜しく侯列に歸し翼戴を主とすべし。

右方今の急務にして、天地間常有の大條理也、心カ協一にして、弊れて後

已まん、何ぞ成敗利鈍を顧るに暇あらんや。

丁卯六月

然し實際には、薩摩は土佐と盟約を結ぶ一方土佐藩全体の意圖を危んで、別に武力討幕の予定行動を進めつゝあつた。さうした氣運を察知した龍馬は、後藤を説いて土佐に送り、藩論を統一させんとした。土佐に歸つた後藤は委細を容堂に具申したところ、容堂は大いに後藤の説に賛同し、愈々大政奉還に乗出す決心を示し、藩中殆んど異議を唱へる者もなかつた。処が強硬派の乾退助、小笠原唯八等口既に京都で薩長と討幕の約を堅めて帰国してゐたこと、て後藤の説を憤慨し、乾はえを容堂に進言して職を奪はれる結果となつたが、此処に藩論の統一を見ることが出来た。

九月四日、後藤は容堂の命に依り幕府に大政奉還を勧告する建白書を携へて入京したが、その時既に京都では、薩長藝の三藩の討幕に關する攻守同盟が成立されようとして居り、後藤等の立場は苦境にあつた。

一方、英國水兵斬殺事件処理の爲長崎にあつた龍馬は、更に長州に赴き、長藩の有志を訪ひ、挙兵の時期尚早論を論じたのであるが、彼等は土佐の建白を以て姑息となしたのみならず、挙兵の約を違へたことを指摘して論駁して来た。龍馬は違約の責に就いては大いに陳謝したが、建白の責に就ては正々堂々えを主張し、

幕府にして若し一家私事のたのみに天下の公論を容れない時に挙兵しても遅くはないからうと云ひ、兩藩の有志を訪ひ百方斡旋して止まらなかつた。

然し薩摩は小松として大政奉還論に協力させる一方、同月下旬を以て三田尻に兵を合し、公然兵を挙げて討幕運動を開始する旨を通告して来た。これを聞いた海援隊の壯士は薩藩の態度を怒り、薩邸に押かけると息巻くのを龍馬は明理を盡して慰留するのであつた。

十月四日、堪りかねた後藤は建白書と共に、当面の急務八策を論じた建言書を提出した。越へて八日には三藩合同大挙の事を決議し、その要目を中御門經之、中山忠能兩卿に示して討幕の密勅を請ひ、翌九日には薩藩の軍艦二隻が兵を塔載して三田尻に到着した。

而もまゝ十月四日には、將軍慶喜が、二條城に在京諸藩の重臣を集めて、政權奉還の意見を聴取することになつてゐたので、流石の龍馬も今は躊躇すべき秋ではな
いと思ひ、左の如き一判を後藤に送つてゐる。

御相談遣らせられ候建白の儀、万一行はれざれば固より必死の覚悟故、御下城に成るべき時には、海援隊一手を以て大樹公の参内の道路を待受け、社稷の爲に不俱戴天の讎を報じ、事の成否に論なく、先生に地下に御面会仕候。

十月十三日、二條城大広間に於て在京諸重藩臣四十余名が参列の席上、慶喜は政權返上の趣旨を述べ、更に老中板倉伊賀守をして、大將軍の書を弁表し、翌十四日には、桑名藩主松平定敬を遣はして、大政奉還の上奏文を朝廷に奉った。

龍馬の最後

皇国の前途を思ふ龍馬等が身命を賭して努力した大政返上は、慶喜の決断に依つて実行され、朝廷も之を御嘉納あらせられて局面は一定したが、薩長藝の間に流奔してゐた真火を交へんとする空気は依然として氷解せず、薩長は兵の移動を止めず、一方幕臣中にも会津、桑名等の諸藩と結束して之に当らうとするものがあり、戦争の危機は刻々に迫つてゐた。

然し龍馬はその当時の状況から一步先んじてゐた。彼が求めるべき新政府の施政方針をどう決めるかを当面の問題として考へてゐた。

十一月十一日、龍馬は越前に赴き光岡八郎（由利公正）を訪ひ、大政返上後の経済政策に就き彼の抱負を傾聴した。そして数日後の夜、越前から帰つた彼が、止宿先である京都河原町の醤油屋近江屋方の二階で、折柄訪ねて来た中岡慎太郎と相談中を、不意に襲つて来た三名の刺客の爲に、中岡と共に敢へない最後を遂げたのである。

慶應三年十一月十五日、夕刻に龍馬を訪ねて来た中岡は夜にひつても帰らうとしなかった。用談の後にも二人の間の懇談はそれからそれへと盡きなかった。今夜は大いに飲んで語らうと云ふので、折柄未合せてゐた門弟の岡本健三郎が小僧の峯吉と一緒に酒を買ひに出掛けた。丁度その後へ數名の武士が訪ねて来た。龍馬の下僕の藤吉が取次に出て、十津川藩士だと云つて差出した紙片を龍馬に渡した。この時、藤吉の後から三名の刺客が秘かに階段を上つて来たことに誰も気がつかなかった。龍馬と中岡が行燈の光でその紙片を読まうとした。

その時である。「坂本さん」と刺客の一人に呼びかけられて龍馬が後を振り向いた瞬間、肩から首にかけて横ぐりに斬つけられた。と同時に藤吉を一刀の下に斬り倒した刺客とも三名の刺客が部屋に闖入して来た。龍馬は床の刀を取らうとした。刺客は二の太刀を打下ろした。龍馬はハッとしてそれを受取めたが、初太刀の痛手で刀の自由が利かず、三の太刀を受け損じて、頭腦を拂口れ、その場に打倒れた。

その間に、中岡は傍の短刀を取つて斬合つたが、左右から斬込まれて全身数ヶ所に傷を受けたところへ、後から一刀袈裟に斬り下げられて昏倒した。

急を聞いた海援隊士や薩長の同士が馳せつけた時には、既に龍馬は黄泉の客になつてゐた。時に三十三歳。

中岡と藤吉は、同志達の介抱でやつと息を吹き返したが、藤吉は翌十六日に、

中岡は十七日の夕方になつて遂に長逝した。中岡時に三十歳であつた。

龍馬にしろ中岡にしろ、当時の勤王家中第一流の人物であり、劍を執つては達人の中に数へられてゐた。これ程の勇者を、不意打と云へ、同時に二人まで手に掛けた刺客は誰であつたか。それに就いては新撰組の近藤勇であつたと云ひ、会津藩見廻組の佐々木唯三郎の所爲だと云はれてゐるが明らかでない。

龍馬及び中岡は、全く、薩長を聯合させ、大政奉還を齎す爲に此世に生れて来たやうなものであつた。明治の新政にもう一歩と云ふ所で非命に斃れねばならなかつた。彼等二人をもう少し生かせて維新後の波瀾の中に活躍させたらと思ふ者も少くないであらう。殊に龍馬は夙に海防の先覚者であり、薩長聯合の次には北海道を開拓して新富源を増殖し、海援隊を率ひて台湾及び南洋諸島に發展、大いに国力伸張を計る大計垂を眞劍に研究してゐたが、特にその死を惜しまれる所以である。

『志士正氣集』に龍馬詠むところの五の一首がある

世の中の人は何ともいひばいへ

わがなすことは我のみぞ知る。

以て龍馬の風格が窺はるゝこと、思ふ。

(完)

断片漫筆

多根恩汀

○ 犬の人格

犬の人格と書いたら、
犬は犬格と云ふでせう。
私も又その一人です。と
ころが、人間の言葉に人
面獸心と云ふのがある。
つまり人間の獸格と云ふ
ことになるのだらう。だ
とすれば、犬の人格と云
ふ文字は不当なもので口
あるまい。

杉山平助氏の隨筆で読
んだのだが、生まれの良
い犬は仕込まれなくてし

其のまゝ、良犬で、純真無
垢な人格美がチャンと侍
はつてゐると書いて、そ
の具體的な例證として、
サツチと云ふ犬の一生に
就いて代一流の瑰麗の筆
を揮つてサツチの人格を
讚美してゐる。

私の知つてゐる人に福
岡県生れの尾崎藤平と云
ふ人がゐる。此の人は小
学校だけの教育を受けた
のみだが、其の教養の高
いこと、深いこと、人格
の美しく且つ淨なこと、
全く天衣無縫で生れたま
ゝに何の飾り氣のない善
良の人格者である。こん

ひ人は牧師に甘うなくて
も、南教師をしなくても
人を導き世を良くする本
当の人間である。

○ 豆腐屋と新聞社

格州時事紙が豆腐屋を
槍玉に上げた。豆腐屋は
組合の力を利用、否、更
用して無茶なプライスを
社会へ持ち出したと云ふ
のであつた。なる程御尤
もな話である。私は格州
時事社の同僚社会の更生
活上の批判に就いては大
いに賛意を表するもので
ある。同時に私は現在の
邦字紙のプライスに就い

て考へてみた。戦前の邦
字新聞、例をシアトルに
とつてみると、北米時事
も大北日報も、八頁で一
週六日発行一年凡幣であ
つた。何れも兩新聞とも四
千部位あるが、奥の山の発行
であつたと思ふ。今のユ
タ日報は吾妻太郎氏の掛
け價のむい所一万部を突
破すると云ふのだ。却存
知の通り四頁一週三日発
行、年七帀である。驚く
勿れ、購読料だけで年七
万帀を突破するのである。
ロッキ―新報は年六帀、
格州時事は八頁で年七帀
五十仙、無論一週六日発

行も一週三日発行も、八
頁の新報も四頁の新報も
拂ふべき社のレントに變
りはないし、紙代は高く
なつてゐるし、タキスも
予想外に高いのだらう。
だが今の新聞社ではたゞ
読みの購読者がむいだら
うし、従つて集金係と云
ふ社員が必要もなく、広
告も新聞社から広告係リ
を差向ける面倒なく、先
方から広告を待ち込んで
来るのだと私は信じてゐ
る。無論広告代を待つて
くれと云ふやうな商人は
むいだらう。工場の人々、
編輯室の給料は高く支拂

つてゐることに相違ない
が、經營の点に於ては戦
前とは雲泥の差があるや
うに思ふが如何？
こんむ具合に考へた私
は豆腐屋をペン玉にあげ
た格州時事社へ一文を投
じて前記のやうな感想を
述べたところ、其の原稿
は可愛相に首尾よく拜む
られたが、編輯長の小笠
原さんからは、丁寧、且
つ懇篤なる手紙を頂いた。
曰く、
多根さん、あの御議論
は確かに拜読しました。
御尤もの御意見でもあり
ました、今の新聞社側

でも云分があります。卸投稿と駁論とを一緒に載せたう面白からうと思つたのですが、一寸現在のところそれ程のスペースがひかつたのです云々豆腐のプライスが問題にしろむら新聞紙のプライスは又問題にして良いだらう。豆腐屋と新聞社とを同一視するのもななく、口に入れる食品と、頭に入れる食品とを同一視するのもないが、商品としてのプライスの問題には区別が要らぬと思つたので、実は新聞社側の言分を聴き駁論も一緒に

に拜見したかつたのだが一切は世に出づかつた。

○ 一年有半

日本のルソー、兆民先生の一年有半に曰く、一年半、諸君は短促なりと曰はん。余は極めて悠久なりと曰ふ。若し短と曰はんと彼せば、十年も短なり。五十年も短なり。百年も短なり。夫れ生時限りありて死後限りなし、限り有るを以て限り無きに比す短にはあらざる也。始より無き也。若し爲す有りて且つ樂しむに於ては、一年半是れ優

に利用するに足らずや。嗚呼所謂一年半も無也。即ち五十年百年も無也。即ち我儕は是れ虚無海上一虚舟と。而して加へて曰く一年とは余が爲には壽命の豊年なりと。

チエンバレンは大英國の予算の説明を四十語ですましたと云ふし、原敬は大抵の話は三十分で片がつけられると云つたとか。中野正剛が議会で二時面有餘の大外交演説に對し、僅か五分面て完全に答へた原敬の如きは、一分面はおろか一秒面さへ大切な時面であつたべ

うう。石坂洋次郎氏の隨筆に無駄に過す時を神を欺むく時だと言ひてある。山本五十六氏は米ぬさんが海軍大臣の時次官であつたが、世評は大官よりも次官に重みがあると言はれた程、頭の良き軍人であつた。

其の人は所謂イガクリ頭で、アメリカ婦人の社交界に顔を出し、ブリツヂを遊んだが、何にかけても頭の良さが物を云つて、百戦百勝の腕前であつたと云ふ。この人がイガクリ頭の説明に「う云つたさうである。」

五分判りにすると、頭を洗ふに時がかわらず、而も綺麗になる。やれ櫛ちや鏡だと云ふ道具も要らぬ。第一に頭を用ふる時間も要らぬ。鏡の前に立つて櫛を使つて男性美をうけ上げる時間で読書でもするなら大したものだと。

こんな人には一年有半の時間は太した價值があつたであらう。

陳腐な話だが、人間の一生は一秒一分の連続である。自分がヒマだから退屈だからと云ふので用もないのに他を訪ねて、

無駄話をして長尻をするのは他の生命を傷つけるに等しく、太りに遠慮すべきだと思ふ。セントルマンとは自分の都合より他人の都合をよく考慮に入れる人の意味だと云ふのは正鵠を得た言葉だと思ふ。

こゝまで書いて来た私は自分の生活を考へてみた。無駄な時間が多し生活全体が隙だらけだ。一年有半を壽命の豊年だと言つて、尊い時を自分の無駄に生活した人に向つては頭を下げねばならぬ。

不完全

王那覇晃洋

日本で私が席を置いてゐた幾つかの学校の中で、
開教師になる爲に佛教の
修行をした、京都の山の
内の中央佛教学院位ゐ師
弟の情愛のこまやかで感
じを受けた学校はない。
恐らく私は他の如何なる
学校よりも優れてゐる点
があつたと思ふ。

その原因は色々あらう
が、一口にして云へば、
不完全だと云ふことに考

へさせられる原因がある
やうに思はれる。

先づ第一に学生諸君が
十分に恵まれた境遇の人
が少く、色々の意味に於
て總てに満されたい不完
全な人々の集りである。

次に学校の制度が臨時應
急的の施設であつて、正
式の秩序的、階級的な今
日の一般の教育制度から
見れば變則的なものであ
る。次に挙ぐべきものは
校舎である。今日でこそ
次第に完備して、稍学校
らしい体裁を整へるやう
になつたけれども、現在
の山の内の角坊院近くへ

移るまでは、集会所時代
寺小屋時代、淳風館時代
西山別院時代と、何れも
誠に不完全なものであつ
たのである。その
不完全がこの佛教学院を
してかくも懐しいものに
したのであると、当時の
講師藤永清徹和上は云は
れてゐたが私も成程と感
じた。

私口昭和八年豊後の月
田塾を見た時、又昭和十
年秋の松下村塾を見た時
誠に大きな教訓を得た。
あの粗末な狭隘な建物か
ら明治政府を建設した幾
多の英傑が輩出したのは

どうしたことであらう。

それは夫等の塾が單なる文字を研究した所でなく、又決して單なる劍法を治めた所でもなく、全く「人」を養成した所であるからである。

私達は常に完全を求め、一生懸命にむつてゐる。完全は永遠の彼方に存在する。永遠の彼方に存在する完全を追ふことに於て私達の生活は意義があるのであるまいか。

私達口と申すると不完全を悲しみかこつのであるが、それは考へ違ひで私達は常に不完全と厭ふ

て完全を願ひつゝ、而も常に不完全に感謝するの反省を持たなくてはならないと思ふのである。

世の中の實際を見るに美人で十分な教育があり、而も地位が高く、富も豊か、女が兎角不幸な生活をし、その反対に天恵豊ならざる女が却つて幸福な家庭を恵まれるのを多く見るのである。

これは單なる一例に過ぎなく、完全、不完全と云ふことは、万事につけて色々の角度から余程深く考へて見るべきであると思ふ。

『争ふ犬に教へられ』

山路義人

私は暇ある毎に歩く癖がある。喩に「犬も歩けば棒に当る」と言ふことがある。それ口じつと構へてゐては駄目だが何事かに奔走して居れば思はぬ良い事に出喰はすと云ふ竟だらうと思はれる。然し僕の場合は大抵禍に遭ふ方が多い。氣まづい友人に会つて古劍を痛められたり、或時は喧嘩を吹かけられたり、いやな事を願まれたりする。

この間も野良犬に後をつけられた。いくら逃げてもついて来る。とうとう僕のバラツク近押かけて来た。うろさけ犬奴とも思つたが、然しさうずして馴々しくして来る仔犬に何故か憐極の心がつつみつと湧き、食堂から残飯を貰つて来て与へてやつた。

家に入つて「小ふん、俺は良いことをした。袖の下からでもまはる子はいい」と云ふ聲もあるわい」と好い氣にひつてゐると、外でギャン／＼と騒ぎ立てる。窓を開けて

見ると、さつきまで温和しく残飯を喰べてゐた筈の仔犬が、何処かの犬と残飯を入れた皿を固に挟んでいさかつてゐる。

実に興味ある眺めである。然し犬の争ひの中に人間社会の醜さとも見せつけられたやうで仄々気がした。自分だけが腹をこやさうと蹴く、蹴けは一方の相手の奴にブツ突かる。隣の奴が温和しければ幸ひだが、仲々負けない。だから争鬭乳轢が益々激しくなる。

終に仔犬は残飯をそつちのけにして逃げ出した。

相手の犬も仔犬を追かけて何処かへ行つてしまつた。

そこで私は先日ユタ日報に掲載された日比氏の「議論は止せ」大目に見ろ」の一文を思ひ出した。日本人同志で、あいつは非国民だ。似非而愛国者だ。俺は純忠日本臣民だ。丁んで云ふせり合ひ口止せ。俺等はみんな一つ穴の狐だぞ！さう思はぬか。と云ふ氏の言葉に痛い所を衝かれたやうな気がして考へさせられた。さうだあの二匹の犬のやうに只腹を肥やさうと蹴く

ならば残飯は無駄にひつ
てしまふ。

キヤンプでも色々と争
闘軋轢を醸した騒擾があ
つた。二万人近くの人向
が生きて行く上には当然
のことかもしれないけれ
ど此処で私け声を大きく
して叫び度い。

「お互ひにお互ひを理解
すると云ふことが如何に
大切なことか」と

世の中が次第に進むに
つれて人間の氣持が自己
主義になつて行くやうだ。
即ち各自が優秀の地位に
入りうとする傾向は必然
的な結果に違ひないが、

そのために他を云々する
ことはどうかと思ふ。

我々はお互ひに同じ穴
の狐である筈だ。自己の
信念を益々確固たるもの
として、大いなる理想に
向つて一日々々を着実に
過して行けば良い。

さうした態度が個人の
福利を増進するばかりか
センター全住民の福利に
なるものだと思感し、矢
張り「大も歩けば棒にあ
たるで良いことに出喰し
たものだ」と、歩く癖を
とり突つてゐる自分であ
る。





詩二篇

断想譜

永見哲男

鶴嶺湖もまた春になつた

砂埃が俺等をからかひ初めた

人間の棲家もなかつたところ

そこに板圍ひの家が建てられた

今日も何百となく汽車から降りて

そこの板と紙の長屋へ入つた

それから永い月日が経つて

女の肌は砂のやうに粗くなつた



田方のこゝろは日に日に荒れる

女は太つて呑氣にのかせてゐる

これまでのことを憶つてみる

これからのことをも思つてみる

あの女達も時々それを考へるだらう

結局つまらぬから意を見る

新曲をステージへ叩き込んで

外を歩けばペニーが鳴る

赤い土を蹴つて水溜りをさけると

霊柩車が横切つて水に影が映つた



陽
春

燻し銀の窓

床板をうつう足の音

生温い薪の燻るやうな日常

熱のないストーブが嗤ってゐるやうだ

愛しい人と人との中だ

堂々とたゝかふ用意もある俺達だ

鈍い銀色の窓

軽い財布を開けて見る

貧しいパンが買はれてきた

若者は無言でそれを引き受可せう

草花の芽が

みんな揃つて窓の光に微笑んでゐる





ほんとうに嬉しさうに 新鮮な精力
わづかに明りと わづかなる水

陽春と云ふ雲のさま

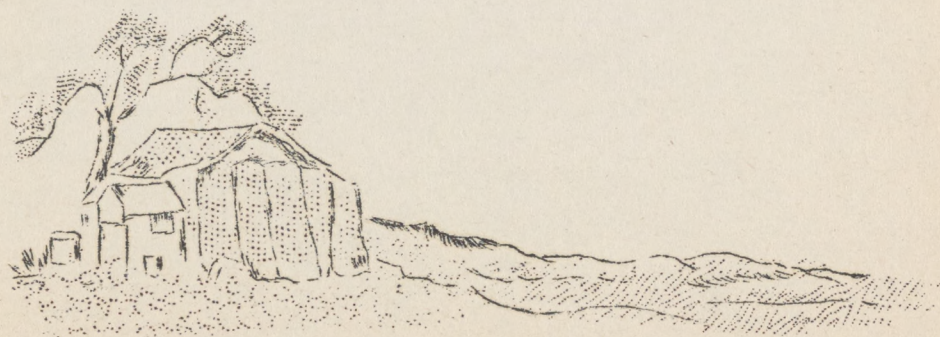
銀光の雲 白銀の雲

漣の雲 逆巻き雲

俺達の好きは妖しき形かたちの雲

早春は雲に乗ってやつて来る

愛しい人と俱に生きるこの頃
和やかにもえる青春の萌芽が
私の感情に蘇ってくる



隨

筆

犬の微笑

富重利夫

私がティピーを好きになつたのは昨年の春頃であつた。ティピーは私が住む部落の或るアパートに飼はれてゐる、エヤ、デルとフオックステリアや何かとの雑種で、その頃未だ一歳半位ゐであつた。黒と褐色の中型の牝の犬で、外見は別段取り立て、云々程の特色もないが、十歳余りのその家の若主人に恥も外聞も構はず、へばりついてゐる様子が私にはとても氣に入つた。

或日、若主人がベンチに掛けてベースボールを見てゐた。ティピーは其の少年の股の間に坐り、顎を片膝の上に乗せ、氣持良さうに眼を閉じてゐた。少年は時々ボールゲームから眼を放しては、ティピーの鼻をつかんで乱暴に頭を左右に揺り動かすのであるが、彼は眼を開かうとせず、相変らず氣持良さうに打振うる、にまかせ、やがて頭の振動が止むと、元の通りに頭を若主人の膝の上に乗せて眠り続けるのであつた。

ティビーは若主人の傍にさへゐれば、世の中に心配する事は何もないと思ひ込んでゐるらしく、始終影の形に馴染が如く此の少年に付き纏ひてゐる。そして常に幸福さうである。私其人固は此の犬が若主人を信頼する十分の一ほど神の攝理に信頼してゐるであらうか。信仰とは神の懷に抱かれることである。何事をも何人をも恐れず、疑はず、心配せず、絶体に神の攝理に信頼し、安心して、神の寵児たる自信を以て、樂しく生きることである。自己の運命を神に任せきつてしまふことである。そして此の犬がするやうに、耽も外面も構はず神の御手に絶つてゐることである。私はティビーを見る度に、彼の叡智を羨ましく思つた。

幸福とは神の御心に從うて生きることである。自ら神の御心を実現することである。その他に人間の幸福はあり得ない。同胞愛の生活、倫理的生活を樂しむ心も、そこから自然と生じて来るのであつて、神の思寵の裕かさに感謝する心なくして、單に博愛、道徳を實行せよと叫ぶことは僞善でもあり不自然でもある。

私は早くティビーと友達になりたいと思つた。そして名前を呼んでみたり、頭を撫でてみたり、クワキースや肉片をよへてみたりして歡心を買はうと努めたが此の犬は毒を喰つたことがあるのが、仲々他人のよへた食物を口にしようとしびい。斯くて一月余り過ぎたが、ティビーと私との親交は少しも深まらなかつた。

或日、ティビーはアイロン、ルームでしきりに吠へてゐた。五六名の少年達が棒切れを以て撃剣の眞似をしてゐるのに加はつて、自分も主人の助太刀をするつも

りて、あちらに吠え、こちらに吠えしてゐるのであつた。やがて彼と彼の主人と室外に現れた。すると突然、気紛れな若主人は意外にも木剣を太上段に横へて、ティビーを一撃の下に打ち倒す姿勢を採つた。多分驚いて逃げ出すだらうと思はれたティビーは、勇敢にも少年の足許へ前進し、頭を低く地面につけ、いざ好敵ござんなれとばかり、隙あらば飛び掛らんとその姿勢を示したが、少年は仲々木剣を打下ろさなかつた。暫く睨み合ひの後、少年はあきらめたと云ふ風にがらりと姿勢を崩して、何事もなかつたやうに、ぶら／＼歩き始めた。ティビーは忽ち飛躍の姿勢を崩して、尻尾を振り／＼少年と並んで緩やかに向ひへ歩いて行つた。

私はますますティビーが好きになつた。彼はユーモアを解する洒落者しゃれものであると共に、同時に一個の小哲学者である。此の世は畢竟するに一場の悲喜劇であつて我々は神から振り当てられた役割を演ずる俳優だと云ふ事を彼は知つてゐるやうに見える。人生の目的は忠実に各自の役割を守つて、出来るだけ立派に演技を努め、劇全体の出来栄を成功させるにあるのだ。元々劇は一個の遊戯であるから余り突き詰めた心で固くなり過ぎてはいけな。固くなり過ぎると生に執着して慾心や煩惱に禍され、生活が不幸になる。さればと云つて、不真面目で、小ざけてゐては、観客も俳優自身も興味索然たるものになるだらう。他の俳優に対してはその長所美点を褒め、自らは真剣に藝を磨いて、これを樂しみにすべきである。これが神の御心に適ふ生活であつて、神の恩寵に対する報恩である。他の俳優の

短所缺點を批難し、自己の藝を誇るのは無用な事だ。

テイビーは相変らず快活で、毎日幸福さうに若主人に従いて歩いてゐた。部落の人達にも万遍なく愛されてゐた。殊に入塾の子供の仲間に入つて、あちらへ走り、こちらへ走り、一役買ったつもりで心得顔にグループの一員らしく遊んでゐる様子がおかしくもあり、可愛くもあつた。私のアパートへ遊びに来ることはあつても、食物だけは依然として頑直に拒絶した。

或時私は、以前ボストンテリアを飼つてゐた時の経験を思ひ出した。そのボストンテリアは胸と首とが短い爲に、尻尾の附け根にゐる蚤を捕へるのに身を跳がいて苦しんだ。私はよく彼のお尻を掻いてやつたものである。その事を思ひ出して、試みにテイビーのお尻を掻いてみたら、彼は心地よげに舌のずりとして、恰も自分で痒い箇所を噛んでゐるつморのやうに見えた。それ以後、彼は私に対して特別の親しみを持つやうになつて、若主人と歩いてゐる時でも、折角気持良さうに草叢の上に晝寝しようとしてゐる時でも、わざわざ近寄つて来て愛嬌を振り撒いた。その都度、私は手袋を脱いで、鼻と眼を軽く撫で上げ、それから丹念にお尻を掻いてやりぬばならなかつた。私が差出す食物も今は安心して喰べるやうになつた。朝の出勤の途中などで、何処かのバラツクの蔭から突然飛び出して来て、私の背後からドンと飛び附くこともあつた。そして一哩の四分の一もある道程を、後になつたり前になつたりして事務所の前まで随つて来た。獨りで歩

き廻つて、ほかの犬と喧嘩でもするのか、時々、耳や顔面に傷をして血を出してゐることもあつた。

その内に私は彼が憂ひ表情をするのに気が附いた。尾を振る反動で、頭を少し左右に振りながら私に近附く時、上唇に皺を寄せて白い牙を剥き出すのである。始めは、何か牙の間に肉片でも挟まつてゐる故だらうと、別段氣にも留めなかつたが、余り再びそんな表情を繰り返すので、或時同室の人に訊いてみた。

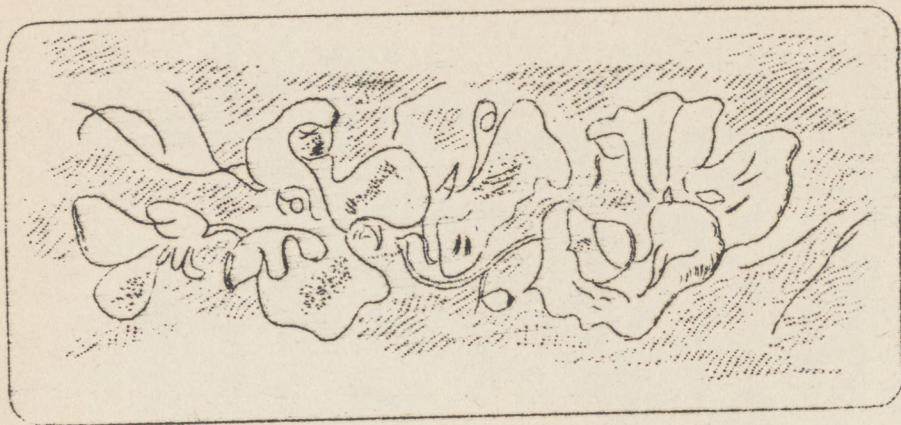
「ティビーはよく牙を剥く癖があるが、どうしたのでせうか」。

「あれはあなただ、犬が微笑するのです」。

「尻尾を振るよりも、飛び附くよりも、何よりも、犬としては最上級の愛嬌の表現なのです」。

と其の人は答へた。





春二題

神代正人

春は和^りみを覚えさす。自然に人々をして融化せしむる一刻を与へてくれる。美しいものを見れば美しいと感じ、淑やかに觸れ、はこよびく好ましさを感じる。春は培ひ撫育する温床の時期であり、成育するものを見て愉悅に浸る親心を万象の中に見受けられもする。春は子供だ、天真爛漫だ。浮世の汚濁が滲み込んだ私の眼に胸に子供の世界が映つて来た。

天真爛漫な兒戯に接したら、日頃鬱積して表現の方法さへ見つからず、常に焦燥感や圧迫感で疲労困憊の極にある大人達の感情の塊りが消

し飛ばされる雰圍氣を子供の世界に見ることが出来るであらう。彼等の世界には權力者なく、大人達を縛る法的の存在もない。意志する者の存在は神そのものであり、純粋な欲求でしかない。此の子供達の世界を掻き混せて彼等の純眞を冒瀆するものは大人の汚垢に染まつた掌である。

斯くして折角の天真爛漫な何時とはなしに萎縮し、曲げられ損はれて行く。大人の世界の醜惡なるものを隠蔽する形式万能主義が、天真の助長を阻害し、どんなに窮屈なものにすることが、形式社会の掟を以て子供を律する時、伸び行く双葉は、疑心暗鬼の大人の世界の前に剪定され、或は去勢されて、非人間的な型に育て上げられて行く。今の時代が長ければ長い程、それに比例して童心は盲目的な形式万能の中で疑暗を涵養し、脆弱性を培つて、心身共に軟化され、枯渴した片輪者に育て上げられてしまう。

大人達の今日此頃の生活が皮相なるもの、みに醒醒して、反省や回顧を失つて人間性は何時の間に脱殻か殻となり只管打算と儉窄にのみ汲々として『父と母は易し、されど父たるは難し』と云つた恥も知らぬ気な状態を続けてゐる。此の現象は勿論時代にも罪はある。さばりながら『父の徳行は其の子に対する最良の遺産なり』の言葉を忘れては余りに子供達が氣の毒だ。

戦争は様々な相剋を生んだ事だらう。助からむいと云ふ気持は大人達を次第々々に逃避的にさせて、觀念の休養を欲求したのであらう。胡魔かしも必要に

なつたかもしれない。だが世たけて酸も甘いも知り過ぎてゐる親達に適當なものか、この環境で見つかる道理はひく、僅に残滓とひつてこびり附いてゐる過去の物象が唯一なものなのである。過去の物の中で、大人達は物質慾に依存し、最も好ましき調味物として餓狼の形相で貪つたものである。而して物質は人間に對して麻痺劑の役目を果してくれるものなのだ。欲すれば欲する程その量を多く必要とする麻痺劑の生命は短く、次から次へ注入しなくては到底堪へられないのが常である。中毒患者は常に藥劑の注入を欲求して止まない。如何に害毒とひらうと問題としない。生命の存続の爲には貪ることを唯一なものとするのである。

斯くて中毒患者の子は遺伝を身につけて成長と共にその顯れを見せる。人間性はかくして喪失されて行く。子供はこの親達に依つて自分達の世界を益々糊塗される。互に人間性の資格をなくして、欲求のみを逞しくして親と子は見苦しく相爭ふ。親は不幸者と誹り、子は親の無理解と無慈悲とを啣つ、親が親の價値を失ひ、子が子たるの本分を守らなくなつて、遂に自己本位になる。情愛は形式的に存在でしかなくなつてしまふ。

可哀想な現代の子供達は何れの方面へ伸びて行くか。天真爛漫さが何処にか影を消して、彼等は大人の剪定から世を曲解して成長する。幼い頭腦に刻み込まれた剪定の跡形は、彼等の成長と共に傷痕を大きくして、親の無慈悲が次第に意識されて行く。人間の素質を掴み得なかつた親達のお陰で、矛盾撞着が生の伸長と

其に生じて行き煩悩となる。

かくて彼等は日毎々々に損はれて行くセンター生活の悲哀を育み行く春の日に感じ、痛く胸を挟うれるのである。

x

x

x

春が来た。意欲の春が来た。雑多な色彩を以て凡てを助長して行く春が来た。拾捨選択して時かねばむらぬ春が来た。

此の春の意欲も、種時きも、或期間を経過すれば必然的に消滅し、効を失ふ運命を持つてゐる。又春は多くの煩悩しさを生む悩ましい期節でもあるやうだ。考へよ、そして生きよと何物か、私達の胸底を叩く。鎖された境遇で強く生きる事の尊さを考へてみた。時潮に削り洗われて細くなった思考力は熱さへなくして倦怠に陥つてゐる。だが僅かな温みが胸に感じられ、人面としての生命の存続を支へてゐる。失われずにゐる意欲が暖き春に温き胸に、仄かな萌しを見せてゐる。春の意欲は固き地殻を破つて萌え出でて生を満喫せんとする。人々は意欲あればこそ生の喜びと意義を知る。而して又人面は、意欲の充分満されたい所に未練と魅惑を賞えるものである。意欲を極端に感ずれば不満を執拗に意識し、意地汚いと思はれる場合もあるが、充足されない事を意識する所から人間的な希望と目的が湧然として起る。が此の境遇では意欲は凡ゆる方面に鎖されて窮屈さを覚える

させてある。それが假令良心的なものであつても、現実の前では娼婦の鏡に対する心境であつてはならない場合が多い。斯くて或者は自己満足の殻に閉ぢ籠つて、他人の苦惱や困憊を嘲り、優越感に浸つてゐる。

こんな状態の中で甘んじてゐていゝのだらうか等と、余計な事に奥心を待つ。

奥心を待つから批判する。批判するからこゝでは、やうになる。こゝはつて煩悶しい世事を感じる。そして自分の内にいふ、せう煩悶を醸成する。奥心は自分を不幸にすると思ひながら、其の不幸を希求してゐる状態が続く。『かくすればかくは

るものと知りながら……』 有名な松陰先生の歌を口吟し、又進歩向上等と自負

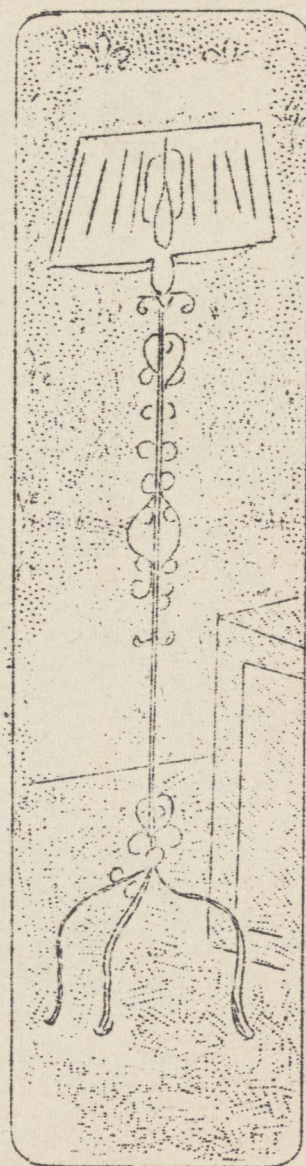
する。小さな自分等がと思ふのだが、周囲が自分にのしかつてくるから、つい自分のほしたくない意欲がそれと共に動いて不平不満を言外に出すことになる。言外にすれば『彼奴は生意氣だ』と言はれるし、世の中と云ふものはうるさい事が充滿してゐるものだと思ひ、世事に耳を覆ひ遁れる様にするが、種々の事象の追跡急にして、押し転ばされてしまふ。日毎に擦傷をかやして總身血塗れて生きて行かねばならない。

斯くしてもまだ人生の意義等と考へる。興味を生む。興味は想像を逞しくする、想像は際限なき美を生む、美化され、それが好ましいものとなつて憧れを抱かす。日毎に得手勝手に意欲を美化して執拗に思念する。情けなしい可哀相な状態に陥つて馬鹿になるのが落ちである。

假令それが良心的意欲であつても、馬鹿になつてまで御披露に及ぶ必要はないが、この意欲と、心の化物は油断してゐてもおぼろけても現れて来る危念千萬なものである。ついうか／＼と現れる、現れるから打突かる、觀念を煩ふやうになる。

春はまたが折角の人間意欲も種蒔きも時代と云ふ大きな時潮が我々を抑へつり流して、殆んど効を奏させない。我々は老ひも若きも共に春を知らぬ人間でゐるひくではならぬ。暗さの中で陰惨な冬のまゝで生きて行く、これが戦争の生んだ敵性人間のだと、諦められぬ人間の弱さが堂々巡りみたいで愚痴を零ばさる。

これも春だから……頭がどうかしてゐる。誰が口ずさむか『云ひたい事も云はないで……』と卑屈になつてゐる自分に痛い歌が流れて来る。萎縮して行く個性がすゝり泣きしてゐる。



教壇に立ちて

土井 靜雄

「先生と呼ばれる程の馬鹿でなし。」

其の先生と呼ばれて来た過去一ケ年余りの自分を顧る。「先生！」それは擦つたい様な、嬉しい様な呼稱である。又反面、群衆裡、殊にキヤンティンなどで「先生今日は」とやられると、答れもうくにせず、赤い顔してこそぐと逃げ去る自分を哀れと思つた事は二度や三度ではない。

「何故か？」と考へてみる。第一に自分が「先生」と呼ばれるだけの自信と資格を欠くからであり、第二には先生たるの自覚を得て居らぬ故であらう。

先づ教壇に立ち、苟も皇民鍊成の實を挙げべき聖職を思ふ時、果して淺學非才の自分に、次の時代を背負つて立つべき小國民の範たるの資格ありや否やと、考へさせられるのである。

子蟻は親蟹の如く横に匍う。子供を見て其の親を知る世の中である。その理よりすれば先生の一拳一動は生徒のそれではあるまいか。

純眞なる adolescent 生徒の耳に聴き、眼に映ずる自分の言動口と考へる時、冷水三斗の思ひがするのである。

うっかり口にする言は生徒の作文の中に織込まれて居り、自分の四角い字癖は生徒の答案の中に現れて来る。現實の姿の中に先生と生徒の斷つても斷ち切れぬ深い因縁を思ふのである。

殊に一番大切な思想的方面に於てつくぐとそれを感じるのである。何故ひらは、私達が讀書する場合に於て、著者の思想を批判しながら読むのが如何に難かしいかを知ると同様に、嘗て見たことのない祖国の風俗習慣を、そして其の國語を習はふとの熱意を以て朝に夕に国民学校に通ひ続ける年若き生徒が、どれ程の批判と検討を以て勉強してゐるだらうか？ 自分は其れを疑ふものである。

少くとも生徒達より、より國語を知り、より多くの風俗を見聞し、より日本的な習慣に慣れてゐる先生の語る言葉をそっくりその儘、白紙の状態にある彼等の脳裡に受け入れるのではあるまいか。何が面白いと云つても、未だ食はざるも

のを喰べ、未だ見ざるものを見、未だ聞かざる事を知る程、面白く且愉快なものはないからである。

斯く考へて来る時、教壇に立つ者の一言一句が如何に生徒の將來を左右するかを痛感すると同時に、其の責任の重大さを知るのである。

それで自分は出来得る限り新しい祖国をありの儘に語る主義をとつてゐる。祖国、それは睡富士や櫻や、近代文明の粹を集めた大都市のみが日本ではない筈である。水車小屋の傍に、額程の水田ある片田舎もあり、下衣だけで未鍛の肌を輝かせながら鰯網を引く漁村もあると云ふ事とも語らねばならない。ありの儘に語るといふ事は、現實に直面した彼等に悲哀の感を抱かしのぐる予防線でもあらう。總てのものを實在せるものよりも美しく見る眼を失つてゐる上級生の前で夢のやうな話は禁物だと思はれる。

団体であらうと、日本精神であらうと、機械の働きであらうと、電機器の作用であらうと、何であらうとを思はず、總ての事物の眞理を掴まんとしてゐるのが生徒なのである。彼等の眼がうんらんと輝き、上体を机上に乗出して来る時、「お前はそれでよいのか」と云ふ声が四方の壁から聞えて来る。そして黒板の前に白墨を持つて立つてゐる自分を省みて「ハッ」と感じることもある。

何が原因してゐるのか、資格がない、さうだ、確かにさうである。そして生徒達が熱心であればあつたけ資格の問題が氣になるのである。

第二には資格を持たぬ所より、悲しいかな「自分は先生だ」と言ふ自覚を充分に持つてゐない事を認めねばならぬ。生徒中に己に家庭の人となつた人や年長の人を見つて、彼等が語学習得に熱心であれ、ある程我が身を省み、責任の重大なるを考へ、教師の立場にある自分を危がむ事もあるが、校長や先輩や又朋友に勵まされて今日に及んだ自分なのである。

斯く考へる時、資格は自信を生み、自信は自覚を得るに至らしめる事を知る。「女は弱し、されど母は強し」、自分は母親だと云ふ自覚は弱かりし女性を強くするものだ。女はそよ吹く風に頭を垂れろけれども、母は大風に会つても折れぬい蘆の様のものである。

父母が親だと云ふ自覚を以て我が子に接する如く、自分も先生だと云ふ自覚を以て教壇に立たねばなるまい。少くともさう努力し、人格完成を期すると共に、皇国新興の祭壇に奉仕すべく日夜勉勵すべきであると思ふ。

教育とは生命の助長であらう。生命は一朝の榮華でなく、無限に伸び行く悠久の力でなくてはならぬ。その生命の助長は愛の肥料によつて成長する。愛、それは生徒に対する自己の總てでなくてはならぬ。精神的であつて形式的であつてはならぬ。人を教へるに行を以てし言を以てしてはならぬ。教師と云ふものを偽装してはならぬ。赤裸々の姿を以て接し、而もそれだけの人格を持たねば百万言の雄辯にも何等の價值も認められなくてあらう。

人工的なものよりも自然的なものに、複雑なものよりも單純なものに、偶裝的なものよりも赤裸々なものに、偉大なる生命の方が秘められてゐると信じ、何時の日にか林間に放つた矢を幾年かの後林間に發するの歡喜を期待しながら白墨を握つてゐる自分でもある。

それは余りにも広大過ぎる希望かもしれない。然し他日、日本を背負つて立つ生徒達は黒一色の鉄柵内に在つて、未だ接しざる祖国の良き臣民たらんと、營々として勉強を續けてゐるのだ。

その尊い生徒達の姿を眼前にする時、お互ひが唯自己の安逸をのみ追つてゐるのはどうかと考へさせられるものがある。

「環境は人生を左右する」とか、これ等の次の日本を背負つて立つ小国民の環境をより清淨に、より神聖にして上げることが、現在の私達に課せられた聖業の一端と云ふことは出来ないであらうか。



詩

緑の傷處

マツイ・シユウスイ

惱みびき惱みには

涙も涸れて

臥^{フシ}廻^ドなき今の我が生

痴^{ウキ}けたる見聞と

空虚^{ウツロ}なる反抗に病みて

あの日この日は

また落ち行く

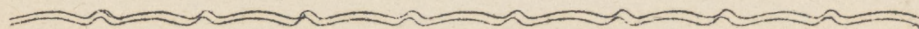
希望も 追索も 追憶^{オモイデ}のうたげも

物^{モノ}なべて影なく

眩^{メユ}さに眼もくらみ

わが靈は朽ちてぞ

なほ失せぬ





あゝ窮^{マハ}みなき

東天の光リ

何処へか光リ渡リ

去^イにけた我々を

安らかに照して

燃えやけー

この現^{ウツ}実と謂はゆる教訓

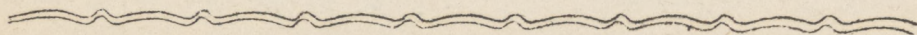
酷くも我々を囚^コり込むのに

あゝ痴^シれにたる教へ

長き夜を盲^メいて

千秋にはためく傷の痕

＝ 流転詩集の一篇 ＝



白雲

双城坊

秋色遠近なく

門を出づれば盡く寒山。

白雲遙かに相識リ

我を待つ蒼梧の間。

借向す盧^ロ軌^{クワン}の鶴

面飛して幾歳か還らんと。

李白は仙人や仙術のことを考へて見たのです。昔の支那人がかうだと思つたやうな李白であつたかどうかは疑口

しいのです。まして日本人も所謂支那人から伝へられた儘に李白を酒仙詩人と思つたかも知甚だ怪しいのです。何故つて李白は酒の詩人でもあるが、民衆詩人としても時の政府を皮肉り、今日の所謂銃後の詩を多く

作つた人

です。白雲が好きで仙人が仙術で白雲に乗つて飛廻る、そこで李白に仙の字をつけたのではなく、山口山人、即ち幽人、隱者、世捨人の意味で仙をつけなければならぬ筈です。彼は超人であり、蟬脱した人であるからです。

盧軌が鶴と云ふのはかうです。鄧徳門の南康記に盧軌は広州の人で、州に仕へて治中と云ふ役についたのです。

若い時から仙術を學んで、その身は能く奮飛したと云ふのです。毎夕虚を凌いで家に帰り、曉は州に還ると。又嘗

て元会に赴いて曉に至り、随從して朝
列に参預することが出来ないうで化して
白鶴となつて帝前に至り、回翔して下
らうとしたのです。威儀等を以てえを
擲つゝ、ゝゝゝがたれたのですぬ。そ
で一雙履を得たと云ふのです。孰もそ
こで驚いて還つて列に就いた。さう記
してあるのですが、李白はその事をも
考へたのですが、元来白雲が好きで、
白雲の詩をものしてゐる中にたま／＼
鮑の仙術のことに聯想が及んだもので
唐文化の一大隆興期に李白がそんな非
科学的なことを信じた筈はありません。
少し位迷信もないと詩中の詩が死んだ
のが十九世紀までの世界の詩界なので
す。

蒼梧の岡、これは蒼梧の野と云つて
堯舜で名高い舜帝の崩地です。この地

をよみ込んだ日本人が忘れられない人
を哭いた詩があります。「哭晁卿衡」が
それです。晁卿とは京都仲麻呂のこと
です。日本では多く朝衡と書くが、
上の間違ひでせうか。蓋龜二年仲麻呂
は留学生となつて唐へ行きました。楊
貴妃で有名な玄宗に仕へて秘書監と云
ふ役になりました。天平勝宝中に遣唐
使藤原清河に従つて日本へ歸らうとし
ました。海上颶風に遭つて安南に漂泊
したので復た唐へ赴きました。仲麻呂
の颶風に遭つたのは楊子江口あたりで
西南に向つて吹流されたらしく、それ
で蒼梧は上海の西南に当るから蒼梧の
野一ぱいに愁色があると云つた詩が次
のものです。

哭晁卿衡

日本泉卿辞帝都

征帆一片繞蓬壺

明月不歸沈碧海

白雲愁色滿蒼梧

李白と仲麻呂は天変仲良しのやうでした。仲麻呂からプレゼントされた日本着を着て昂藏（氣宇軒昂）として風塵を出たといふ詩があるを見ては分ります。

橈を廻らす楚江の濱

策を振ふ楊子の津

身に日本の衣を着け

昂藏風塵を出づ

全詩句百二十行、字にして五言詩た

から、六百字の長詩「王屋山人魏萬が王屋に還るを送る」と言ふの、四行だけ抜粋して居きます。私だつてこれを暗記してゐるわけでは無いのです。漢學者では無いのですから。閑話休題と云つても、これがそれ／＼閑話ですかうもう少し閑談させて下さい。私は李日と云ふと白雲を想ふのです。

仲麻呂を偲んだ中にも白雲、愁しみの雲が詠じてあります。

「白雲歌送劉十六歸山」いかのほど白雲に息吹を通はせてゐます。

楚山秦山皆白雲

白雲處處長隨君

長隨君入楚山裏

雲亦隨君渡湘水

湖水に女蘿衣

白雲堪臥君早歸

私はいつもこれを読みます、六行
中殊に楚山秦山皆白雲など、楚の歴史
も秦の歴史も皆白雲だと云ふやうに響

或んです。(女蘿とは葛かづらのこと)

さあ皆さん、一緒に詩吟しませう。

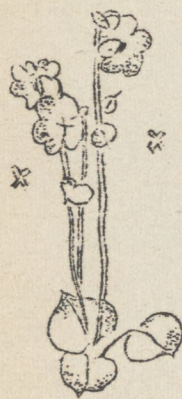
「楚山秦山 皆白雲、白雲處處 長し

へに君に隨ふ。長しへに君に隨ふ。君

は入る楚山の裏、雲も亦 君に隨つて

湘水を渡る。湘水の上、女蘿の衣。白

雲臥すに堪へたり君早く歸れ。



圖書部

書籍紹介

海藏寺明

III

前稿では主として自然科学の書籍を紹介し、宇宙の生成、人類の発生を、それぞれの書籍に就いて見られたこと、思ふ。真正人類にまで進化した人間は(有史前)更に人文的に発達して来た。(有史後)有史前(約七八千年以前)及び後の人類移動より皇紀元年迄の事に就いての書籍を紹介してみたいと思ふ。

先づ『民族移動史』 エーシー・ハツドン著(丁)より進む。

「民族の移動は窮迫と誘引とに原因するものであつて、前者は常に食物の缺乏又は實際的には同一に帰する人口過剰の結果によるものである。早晚一国の人口の過剰が其の正常な食物の供給を超過する時期が来るものである。誘引によつて行はれる異動は、一般に民族は愛郷心を有し、其の土地を離れるには二重の

生活状況を要求するが故に稀であるらしい。誘引による移動の最も簡單なる事例
開拓された工地又は豊穠な谿谷に近い不毛な草原又は高原に住んでゐる民族の
場合である。一般に農耕民は戦争を嫌厭し、又武備も不充份である。それで彼
等は其の生活状態が栄えれば栄えるだけ其の文化によつて柔弱になり勝である、
かくして常に近隣の匪徒によつて攻撃されるのである。この匪徒は或場合には
分捕品を以て自己の郷土に退くが、或場合には該征服民族中に殘留して彼等と
同化し遂に文明化される。そして順に境地の野蠻な同朋の侵入に従ふやうにな
るのである。斯くして自動的社会機制が構成せられるのであつて、これと同時
に野蠻人を文明化し、生活條件が安易なために柔弱となつたものを勢力づける。
又假令移住した民族が永続的に被征服民族に影響する文化と言語をもちつた
としても、原住民がかなりの大数生存し得るならば、必然的に新来者の人種的
純粹性は損はれ、且つ土着人種型が再立して再び優勢になる傾向がある。……
……牧民が恐れる主要な危険は水の缺乏である。軽度の旱魃の継続は牧畜を
不利ならしめるが、更に全国が明らかに乾燥すると大規模な移動が必要になつ
て来る。農耕民に与へられる影響も甚大であるが、或程度まで灌漑によつて、
或は又集約的な耕作によつて増加して行く人口を該工地が養ひ得るやうにし得
るのである。然し乍らその資源が貿易によつて補増されなければ直に一定の限
界に到達するのである。……人類の移動は流水の移動の如く、云はゞ境壁

に続された平地の最も抵抗の少い線を取つて流れる。それで若し平地又は谿谷の人口が稠密であるならば、地理的境壁より更に大なる抵抗を予へるものであつて、移動の潮流は其の時には境壁を越え又は沿つて流れる。それで境壁は比較的なものであり越え得ない場合は稀である。

飢餓と奪略のみが移動に打する唯一の行動をなすものでは無い。北米の西部の優勝者の烈しき気性口、東部諸州に於て生活し得ないことに因づくものでもなく、又急速に富を期待する爲でも無い。土地に対する熱望とか、更により多くの土地を得んとすると云ふことは其の説明の一部に過ぎない。黄金を求めて殺到するものは富を一攫しようとするものであるから、これとは違ふのである。………社会、政治、若しくは宗教的羈絆から脱れて自由にせうとする運動はエチオピアから脱したヘブライ奴僕、出埃及^{イタントス}、メイフラワー号の航海、又はプール人の移動の如く、種々の移動を招来したのである。

宗教的熱情は、佛教、回教、基督教史に見えろ如く、人種拡張を刺激し、住民の移動と導くものである。半月旗と剣、十字架とエルドラードー（スペイン人の想像せし新世界の黄金国）の金との参加者は二重の熱情にもとづいてゐたものである。普通の歴史家にとつて、記述するのに甚だ戯曲的である民族移動は——例へば近代の欧州から米國への移住に於けるが如き——靜かな確實な一地域から一地域への人口移動よりも重要なものではない。斯くの如き移動は、一回

の著しき又は致命的人口缺乏をさへ招来するものであつて、母国は永く荒廢に歸し、又は東部ドイツやスラヴ族の場合に於けるが如く其の中に移民民族が充すことにむるのである。……民族の移動は直接の原因からばかり行はれるものではなく、或場合には一見何等關係のひいやうひ遠い事象にまで追索され得るのである。人爲的境壁さへも遠大な影響を持つてあるものなのである。支那の万里の長城の建設は最も大なる結果を伴つた事件であつて、それは確かにローマ帝国の崩壞に強く寄与されたものである。

移動の證原は主に民族の體質的特性、細工品、慣習、民間説話、言語に尋ねらるべきである。細工品は材料、形状、技術又は裝飾の特性が著しいため、明確に特定の民族群又は一定地域に歸し得ることが屢々ある故、往々人種運動の證示として挙げられるが、其の存在は單なる借用に基いてゐることもある。時の経過に従つて形状、技術、裝飾が變化することもあるが、其の際此れは明らかに進化が其の場所に於て起つたことを示すものであるが、又は外から影響を受けたものを示すものであるかを決定する必要がある。若し後者であることが證示されると、此の變化は此の地方に他民族が移住して来たことに基づいてゐるか——即ち人種的漂動——又は此の改革が奪略若しくは貿易によつて渡来した事物の模倣の結果——即ち文化的漂動——であるかの問題が起るのである。家畜動物、栽培植物の輸入と利用法とは前述したこと、類似してゐると考

へられる。例へばアメリカに馬が輸入された事は、人種的漂動に基づくが、^ゴ平
原インディアン及び南洋のパンパス（南米アマゾン河以南にある大草原）のイ
ンディアンが其れを使用する事は文化漂動である。同様の議論が或程度まで慣
習、宇宙観念、儀式にも適用する事が出来る。後者の場合には常に個人的影響
が加はるらしいが、然し其の結果は數と比例しないであらう。これらの事例に
於て人種漂動は極めて僅少である。説話は一民族から他民族へと伝承され得る
が、然し人類恩性の本質的同一性によつて同じ單純なる動機が獨立に創生され
得る。しかしながら複雑なる逸話が異つた国に起つてゐるならば、明確な信用
があつた事を示してゐる。更に民族説話——特に神話學を取扱つたもの——は
往々異つた地理的環境に於ける早期の狀態を反映する。民族が如何に容易に外
来語を採用し得るかと言ふことは驚くべき程である。而もそれは殆んど何時も
構成的、音素的变化を其の過程の中に受けるものである。例へば印度ゲルマン
語の大群は主に異種征服者の言語を採用した服従民族から結果したものである。
或国の早期言語は——それは或場合には例へばゲルマン語の如く音変化を受け
たのであつて——往々地名に残つてゐるのである。言語は人種接觸を示す現準
ではあるが必ずしも移動を示す現準ではない。

尚同書には、有史前、有史後の民族移動を詳細に示した五大州の地圖があり、
民族移動の歴史を知る上に於て大いに參考にむることゝ思ふ。

群をひして漂流して居た人類も同種が發展するにつれて、氏族と云ふ部落となつて私有財産が決定するに及んで家族制は定まり、數部落聯合して他部落に對抗或は征服し、亦聯合部族内には自づから強力なものと微力なものがあり、強者はよく他を圧して遂に國家の体制をなすに到つたのが順序であらう。人類發生の地小亞細亞あたりが最も早く文明の發達期につき、古代國家最古のものは、少くとも七千前には以前のことであらう。チグリス、ユーフラテス兩河の流域（古代にはユーフラテス河もペルシヤ灣に注いでゐた）ナイル流域、シナイ半島、オーマン半島地方、ペペルマンデブ地方がそれだ。くだつて四千五百年頃には印度洋の沿岸を伝うてセイロンに進み、更にスマトラ海峽を経てジャワに根を下した。他の一派はペルシヤ高原、中央アジア高原に一大勢力をなして進み来り、或はチベツトに入り、或はツングリヤ及びシベリアを経て支那黄河の沿岸に根を下した。以上の事は『民族移動史』と關聯して次の諸書籍を見れば詳しく知ることが出来るであらう。

『世界人類史物語 上、下巻』 ラモン、コフラン著 (7)

『人間はどれだけのことをして来たか』 恒藤 恭著 (14)

『西洋史論』 松本彦次郎、広瀬哲士共著 (5)

次に古代國家の建設衰亡或は事蹟の神武天皇の大利の檀原に御即位遊ばされ
た皇紀元年までを大体に列記してみよう。年代及び列記法は主として

三七四〇

古王国(三七四〇—一五四〇)メネス、エジプト古王国創建の祖にして即ち第一王朝の祖なり。中王国(一五四〇—一〇四〇)セム種のヒクソス民族エジプトに侵入し、第十五王朝を起す。新王国(一〇四〇—後一三六)エジプト人アアメス、ヒクソスを国外に追ひ第十八王朝を起し、古王国の文化を復す。第二十六王朝に至つてペルシヤ王カンビセスに滅ぼさる。ビラミット、テベリント、オベリスク、スフィンクスはすべて古王国時代の建築なり。

三三四〇

古バビロニア(カルデア)王国の創建。これより先セム種族アジヤ種じろスメル、アツカドニ族の住地カルデアに入る。アジヤ種のチユニア種族エラムの王古バビロニアを征服し、其の属国とす。(一六二六)バビロン王ハンムラビ古バビロニア王国を統一し、エラムの覇権を脱す。(一五九〇)アツシリヤの独立を承認し、(七九〇)後、王ゲラトニンにより滅せらる。(六三〇)

支那開創の世。漢族西北方より東南下し、苗族を追ひ、黃河沿岸に諸部落を定め、燧人氏の部落最強、仁義氏の盛時（三二五〇頃）神農氏の雄視（二二二〇頃）黃帝（軒轅氏）黃河、楊子江の南を定の支那帝國を統一す。（一九八〇）小皞（金天氏）帝顓頊（高陽氏）帝嚳（高辛氏）等の治世（一九三〇—一六九六）以上で支那開創の世終る、開創の世に於て八卦、文字、結婚制度、農、漁、獵、医、法、政、商、樂、貨幣、養蠶等の創始。

アフリヤ種族中央アジア、カスビ海東部より分散遷移す。一民族イラン高原南部（ペルシヤ）と西北部（メチヤ）に上着す。（一四一〇頃）一派はギリシヤの北西方及びイタリヤの北部に入る。（二六〇頃）今一派はインド、ガンガ流域を侵領し、韋陀頌歌盛に歌はる。（八四〇頃）更にデツカン南部を除きインドを侵領す（六四〇頃）

帝堯即位して七十年、舜攝任す。帝舜即位し（二五九五）三十二年、禹攝任す。帝禹は顓頊の孫（一五九五）即位、国号を夏といふ。その子啓父禹の後を継ぐ（一五四五）又那王位世襲の始め。帝癸位に即くに及び殷の湯王により南巢に放たる（一一五八）夏十七

主四百三十九年にて亡ぶ。

一三四〇

ヘブライの酋長アブラハム、カルデア地方を去りてパレスチナに移る。後エジプトのゴシエンに移住す(二〇七〇)。(六六〇)モーゼヘブライ人を率ひてエジプトを去る。(シナイ山の十戒、モーゼの法律)パレスチナの敷土を征服す。(五九〇)ヘブライ人神政(高僧政治)を廢し、王国を建つ(四三五)カウ王選定せらる。ダヴィット王(三九五—三五五)イエルサレムを取り首都とす。ソロモン王(三五五—三一五)王国最盛の時代。ソロモン死し国分れてユダヤ王国(首府イエルサレム)(三一五—六二)及びイスラヘル王国(首府サマリヤ)(三一五—後七五)となる。

一二四〇

フェニキヤ人のエジプト在住者エジプト文字より三十二字母を作り之を使用す。アルファベットの始のなり。フェニキヤ人諸市を建て、聯合し、各市に世襲の王を戴く。シドン聯合都市の中心となり(六四〇)極盛時現出。(五九〇頃より)フェニキヤ植民を始む。チルス市フェニキヤ諸市の覇權を握る。(四四〇)フェニキヤ人の航海(三九〇頃より)西方に渡リイギリスを發見す。フェニキヤ諸市(後

五五) パビロニアの屈地となり、チル市のみは(後八五)に滅せらる。ガラス、紫色染料、黄金細工をよくす。

成湯、毫に即位し国号を商といふ。これより十六代盤庚再び毫に都し国号を殷といふ(七四二) 殷二十八王、六百四十四年にて亡ぶ。

一〇四〇

アツシリヤ自う王国を稱す。カルデヤ(バビロニア)と同系なるが、

反して除々に隆盛となり、シャルマネセル一世に至り、その子チグラトニン王バビロニアを滅し知事を置きて治む(六三〇)チグラトリルサル一世の治世には征伐国四十に及ぶ。バビロンの知事ナボナツサン反す。(ハセーセニ)シャルマネセル四世(六七一六)フエニキヤ諸市の乱を征し、イスラエル王国を討つ。サルゴン王(六二四)サマリヤを略し、イスラエル王国を滅す。(六二)

バビロン知事反

して王と稱し、ユダヤ、エジプトと連合し、対抗の政策を取る。(六二) センナケリッブ王(四四二)エジプト、エチオピア及びユダヤ人と戦ひて敗る。アッスルバニベル王(ハ一後三五)大図書館を建て文藝隆盛を極む。メチヤ王バビロンの鎮將ナボラサルと同盟してアツシリヤを滅す(後五五)

ギリシヤのミケネ時代（九四〇—三四〇）ギリシヤはローマ人の稱呼にして自う国をヘラス、国人をヘレネスと稱す。（三三四〇頃）中央アジアから遷移したアーリヤ種にして、南ロシアあたりの草原地帯の遊牧民、ギリシヤの北西方に移住し（二二六〇頃）後南下し、分れて、イオニヤ、ドリヤ、エオリヤ、アカイアの四族となる。南部中部、北部に都市国家を建つ。ギリシヤの英雄時代（七四〇—五四〇）トロヤ戦争（五三三—五二四）小アジアに於けるギリシヤ植民地關係上の争。ドリヤ族アテネに寇し、アテネ王コドルス戦死し、アテネ、アルコン（統領終身官——貴族）政治となる。（四〇六—三九三）ギリシヤ諸市年二回善隣會議（宗教同盟）を開く。（三八〇）詩人ホーマの時代（三四〇）フェニキヤ人よりアルファベットを輸入す。（三二五）リゲルグス、スパルタの法典を定の尚武教育を起す。（二七〇）第一オリンピア競技。（一一六）ギリシヤの植民せる下イタリヤ諸市の隆盛（四〇）コリント海上の權力を握り造船術大いに進む。後年文藝復興はこの古代ギリシヤの古典研究から發した。ギリシヤ文明は西欧文明の中にあつて未だに輝しい生命をもつてゐる。

周公、太公望の計を用ひて殷を滅し王位に即く。国を周と号す。

武王なり。殷の伯夷、叔齊、首陽山に餓死す。成王幼にして他に
即き（四五五）周公旦、王を扶く。制務百殷礼学を定の、後世これ
に模範をとる。召公奭、周公旦と王室を輔く。武王より十四代平
王位に即き（一一〇）大戍の難を避け東都洛邑に遷る。四十九年天
子微弱にして諸公放恣、以後春秋の世と云ふ。当時、魯、衛、
曹、鄭、蔡、燕（以上周と同姓）齊、陳、宋、楚、秦の十二
代諸侯あり。大侯頻りに小国を併吞し、臣は其の君を弑し、春秋
の世（六一―後二五〇）絶つて戦国の世に移る頃、大諸侯の面目
を保てるもの燕、楚、秦のみ。其の内齊の桓公（三六―後一八）
普の文公、楚の荘王、吳王夫差、越王勾踐を春秋の五霸と稱す。
桓王の世（五九―三七）五年、宋公湫、公衛公、河南の瓦屋に盟か。
十六年楚僭して王と稱す。荘王の世（三六―三三）十二年齊の桓
公立ち、管仲（鮑叔これを推す、世に云ふ管鮑の交り）を相とす。
僖王の世（二一―一七）齊侯、宋蔡邾と山東の北杏に会す。三年齊
侯、宋公、陳公等と山東の鄆に会す。齊の桓公始めて霸たり。惠
王（十六―後九）二年王子頽乱を作す。六年楚好を諸侯に通ず。
惠五十七年は皇紀元年なり。

三四〇

ザラストラ（ゾロアストル）ペルシヤの回教。善惡二元教を創む。
殺伐なりし太古のペルシヤ人はこれによつて惡を憎んでその人を
憎まず大いに領民の心を收む。

三四〇

印度社会四階級に分る。神政組織マヌ法典なる。（一四〇）ブラーマ
ン階級專制時代、ブナナマス經、口語伝承（一四〇頃より）

一五三

マケドニア王国の創建。

九三

ローマ建設（ローマの紀元元年）ロムルスを国祖とす。ローマの
王政（九三—後一五二）ローマ曆法を改め十月を十二月とす。
（一五〇）

其の他メヂヤ人（四八）強勢となりデヨケスを首領とす。リヂヤ
王国も又ギゲス王となり（二七—後二四）沿岸のギリシヤ諸市を
征伐す。皇紀元年は西歴前六六の年なり。

右表の参考書籍は『世界年表』並びに『中等西洋歴史詳解』高桑駒吉著（五）
『東洋史教科書』桑原隲藏著（五）である。
（この稿づく）



短歌

俳句
川柳

新俳壇

白歌壇

川柳漫言

同八作

川柳解訓



鮑 々 々 鮑

風もよくホッラ一軒や庭涼し
鮑山に雲居て去らず五月空

閑涼しホッリと灯る見張塔
欄干に哨兵梅雨の空仰く

梅雨空や伸び放題の庭の草
月白く残して山の明け易き

はた、神鷲しぐもり草の上に
熔岩の道消ゆる山の端夏夜段

百夏朝の露路や狂かせ踊り居る
梅雨空の晴間つれしき庭手入

永元夢の策にへきしき新午夢
うなだれし沙漠の花よ五月空

岩 下 蘇 村

田 中 青 風

山 田 如 骨

矢 野 紫 香

鈴 木 黒 光

大 館 無 涯

句 今 句 抄

食は残る子猫の茶碗沈みけり
梅雨空や列長々と雨音所

梅雨空や重たく揺る、蜘蛛の網
猫の子の今度り来し鈴の音

一文字街路すがしき夏の朝
梅雨空の空気に咳く患者大う

からす今標傾きぬ五月空
雨の間を雲雀鳴くなり五月空

落雷に燈火消えて暫くは
雷の峰より峰へ座移りす

涼きや大鼈落つる水の音
おのが尾を追ふてくる子猫かな

池 永 肥 州

中 谷 松 畔

山 本 涸 川

藤 井 九 應

今 村 桃 村

森 山 一 空

新俳壇

佐藤知星

萬歳で送ったものゝ。日系兵の銃の向けどころ

月夜の砂にうつる自分の酔ふてゆく影

雀来て二羽とんでゆく二羽であつた

世から花が飛んでくる川は白柳

五月しろ雲自動車ほこり立てゆく

捨られたアオオン草を出して砂原に吹かれてる

少女の身を取つてゆく草の花は蝶がくる

轉任してから老けた私のかがみの顔

口紅が目につくキヤンチンの賣子

風が夜どうし吹いた櫻散りすぎてあり

打者の影も投手の影も日がのびてゐる

牛吼ゆる聲も柵の遠くの春の夕ぐれ

白砂歌壇

水 上 穂 吾

潮風に頬吹かせて、白珠の顔をみがき居りこの夕まぐれ
夕暎の光りうやうやする路の野良人の影は地にくぐもりぬ

西 晩 光

亡き母の寫眞おろがを一時（たまゆら）はわりては我れの心 すらふ
鳴り出でし鐘のかききは、おぼくとしむまやぶるお心せつなき

山 路 義 人

いたつきに細れる腕のかなしもよからく握るに赤子のあまりけり
小さきは小さきまゝに花を持つ 野草の道を歩む親しき

橋 本 京 詩

青草の匂ひみでつゝ君とゆく野の氣はたゞに静けかりけり

一人なる従妹を送りて郵屋ぬちのむつそりひろく日の暮れをとす

ひと日だに煙草喫はではおられずといふ人を吾れあはれみも見し

言ひだすの思ひか白々息に顔（おもて）を春の夕へは君をこそ思へ

夜をこめてやれもまた、雨の音うつし身止しみてまどろみがよし



川柳慢言

い
な
牛
涼

アイダホ移動

一九四二、四月三十日から満四ヶ月と三日間の假住居であつたビヤロップから念慮を九月三日出發とな
り午前十時頃から起きて位度を蘇生へて居るとバスが来て九時半停車場へ向ふ。

キャンプの東

南隅に霜夕笑を旗を見て居た雪のレニヤの雄姿も當分見られまいと思ふと何となく名残り
惜しい限りであつた。

見馴れたるレニヤへ暫し暇とを

を前々時々々で歸出發するに中令とならぬ身一着に食堂へ繰り込むだ久し振りでサービスは腹ろ
よかうな。

指足された橋子へ掛りると

車中談記者とカメラが待てぬまう

とは凱旋の將軍が時の人の上京でもないけれども口から出まかせを書きつけた。

ポートランド迄の途中幾台もなくすれ違ふ汽車と云ふ汽車皆軍需品の満載流石に波濤は濃厚に戰時色を帯びてゐる更にポ市は名にし負ふ西海岸のウカゴ黒煙を上げてゐる停車場一時間半四時出發哥川の南山岸を東行する奇勝を眼前に望みながら夕食の卓に着いた曾遊の地耶馬溪を幾千倍もした壮大なものの、山のたゞすきい水の流れ巨岩の偉容宛然南函山水中に逍遙するの思ひ餘に巨巖と山巒との間に雲を挟める能は嘗て見た大觀のふしを画ける筆致を思はしめて懐かしい眺めであつた。天地の自然造物主の偉大な天工に自ら頭が下る。

既にして陽は西山に没して後にも意外の眺めをまきほる程に夜の世界となり何時しか吾人安に眠りに落ちて車中又人聲もなし。

九月四日、朝眼醒れば追々アウダも近きか一眺の高原地帯満紫色の石が點々として一見潮干海の海底を走るが如く眼の届く限り黄白色な野草に蔽はれ廣漠たる眺望は奥平地方の縁に包まれた才林林地帯を通過して來た眼には御珍らしいけれ其何の變化もなく直に見飽きるのであるが其れでも處々に水鏡を利用してへを耕作して今や二層目の草の芽が青々眼に美しく映した、行けどく山らしい山はなくゆるい波紋の起伏を繰り返へくする處々小さな農家も見へる其家の四方にポプラを廻らしてゐる處、相當風が強い

度だと領ける。

川境近くハンチントンで朝食朝七時、之れより汽車は箱下り路となり九時十時車中
ジリ／＼着きたるやうに二三の發病者もあつたが汽車が目的地へ着いたのは午後三時
土着キャンプの郊外八哩位の處命拾ひしたとばかり暫かるやうに汽車から降りて出迎へのバス
に投して一路キャンプに向つた所に聞いて居ても沙漠風は初見參

沙漠風少年世界で見た通り

出迎のバス路一ぱいの沙漠

此處に来て一人幾ら風の影響

夕方部屋の上當に終り一夜明ると翌一着に本市吟社の横田若雨君が訪ねて下さつた先發隊
からの手紙で承知して居た通り鈴蛇の名所青少年達は隊を組んで蛇退治餅巻宴に勝の出立
今様少年會冬郎と取りの面かましき

蛇狩に誘へば一人ずつと消え

笑ひ給ふな蛇狩は遠慮した河一つ隔て、向ふに農家があるが周囲は眼の届く限りセーザ原

牧場の馬と夕焼け

沙漠風遊ぶキャンプの子等はばり

蛇狩の子等幾組も朝を出す

平筆の生活へ思ひは葉風

—— 坂本多華芳師追悼句會 ——

歌句

合志子の臉の中にコンパイプ

九月廿六日、R.M.の許可を得て、山手土香川柳吟社創立發會式並句會を三十二區食堂に開く。集る者沙市、ホ市両吟社三十四名。

初句會、笑顔で女顔に迎へられ

待望の句會、笑顔で風邪を押し

柳家鬼堂君は所外出傷するとして當日缺席された事は物足らぬ別れの握手交はしながら

芋掘の句帳忘れぬ心掛

十月十一月毎週句會する内に今年も押し迫まり、寒さ愈々烈くなれ共

下水道木立のまゝに年を越し

歸国する夢を残して年の暮

一月七日下水道開通九月からの御断情（兼業）一時に晴れた序に日記も語も蘇で（自心）。



銭形岩瀬同人作

山中桂甫

地球儀を見詰め同窓生のこと

軟珠も通りすがりに少し見る

お辞儀する用意して待つ一年生

下手な書をかいて生徒に喜ばれ

真田桔梗

母一人子一人偶に灯が入り

墓石は冷たく過去を語らざる

度之心として膝からくぼんと打ち

古釘は悲しい音を立て、振り

景山弓翠

興亡を賭す聖戰へ林は歌を聞く

望郷の心は遠る西雲を

虹の橋指さす子や寺の鐘は鈴鹿

美しい虹よ消えろ子や寺の歌

角 素 子

三日月よさよなり腕の子は眠り

消えかゝる虹へはれて母と佇む

花植えろつむり北月より高い銀

用もないのに先生を呼び止める

橋 本 京 詩

ガツガツとこだわる義理や大分まい

凡人にある性格を自慢する

かたくな、心淋しくひとりゐる

すぐ腹をさす、男といふはられ

勝木水郷

歎かれ笑つておれる齡となり

頼み事念のおされぬ間柄

目の前でハイ賣切れの列に立ち

先出の匂ひや色のミスシツビ

石川凡才

ヒステリーと言ふ病名が怖くなり

子の世界から物々の交際が

血縁の甚あり歸還バーミット

俺の癖そのまゝの子を叱る胸

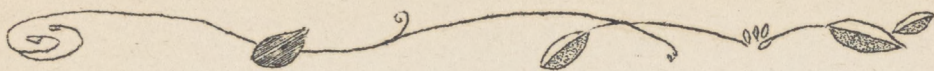
小林小鳥

世も咲き縁もえても未亡人

試験とは生くる苦痛か目の曇り

何が斯う淋しい狂ふ人の聲

置去られ跡更流星光る



二階堂 泣水

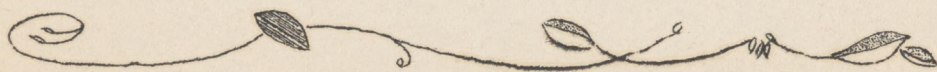
戦況と鶏香にしてる泣いてゐる
曰茶論の極みと勢をすうと言ふ
旋風の行半見事だ犬が吠え
何處から来たか蛙ようんとなけ

水 畑 素 人

騒いで寂しい友を聞いてゐる
不意に其の夜の戦慄の聲おとす
肺を寂しがらせる日曜日
収束所夢みて、今朝雨静か

兒 玉 八 角

たんぼに別れを泣いて日が流れ
孤れく切れて同室誰も居ず
サイレンが鳴れば話を早くする
道去りの犬に轉住見送られ



川柳解剖

心玉ハナ

娘 只今ア――

母 お前今迄何處へ行つてゐたの。

娘 御免なさい、おそくなつて、歩いてゐたわ。

母 歩いて……誰と……

娘 獨りで……

母 後生だからもうそんなことはしないでくれ、母さんとても耐へられないから……

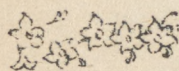
娘 あたし黙つたね……フエンスの處に停つて汽車の動き出すのを見ていたの上。

母 何、お前どうしたの……

娘 どうつてわけはないの、わからないわ、たまごんやり……こうぼうつと……

汽車が笛を鳴らして出て行くのを見てゐると、とてもいゝ氣持になるの……

雲霧の中に灯りが消えて行くの……それは綺麗なのよ、いろいろのこと思出し



おれ、ほらお父さんがまだ生きていらした時分、春のすぐ氣が鐵道だったでせう。あたし小さい時から汽車が好きだったわね……………あの頃のみなさん今とうしてゐるのせう。會いたいわ……………母さんもうお父さんのお墓参りも出来をいわね……………

任んやれた都へ歸る汽車の笛

鬼堂

弟。近頃の工合はどんなでせうか。

看護婦。だんく、落付いて来たようですけど……………

弟。そうですか、いろいろ御面倒をかけます。

兄。清二……………お前達は其處で何をひそく話してゐるのだい。

弟。お兄さん。静かなものだから任んやゐるかと思ひました。

兄。休むタイムなどあるものか、もう出發まで二週間きり無いさうだ。

弟。あまり無茶なことはないけませんよ。看護婦さんにも氣毒ですわね。

兄。解つてゐるよ……………清二、お前も僕と一緒に歸郷しないか……………収容所に長く

ゐたり人間は駄目だぞ。隣室の患者など可哀想に捨てられお寺君のことばかり

り嘆いてゐるようだ……………だんく、あんな人間が増えて来たらう。

看護婦。ほんとに………貴方は二週間したら日本へ行けるのですもの。

もう中つくりお休みになつたがい、ですわ、

發狂の後も歸國を口走り

故國にはやはりいゝものがある。

思ふこと云へば理窟になる若さ

施して心の曇りなき日なり

成行に任すとしても不寝つかれず

僅かすて家に描寫された心理ながら、味はふに駭文を要しないのである。

牛と並れて自由な身を持ち

此のひし／＼と迫るやうせなさは、さながら現在の我々ではなからうか。

地下鉄に荷物と策うは旅の人

映画のラストシーンを思はすような寫生にも又吾々の旅情はうづくのである。

教惠

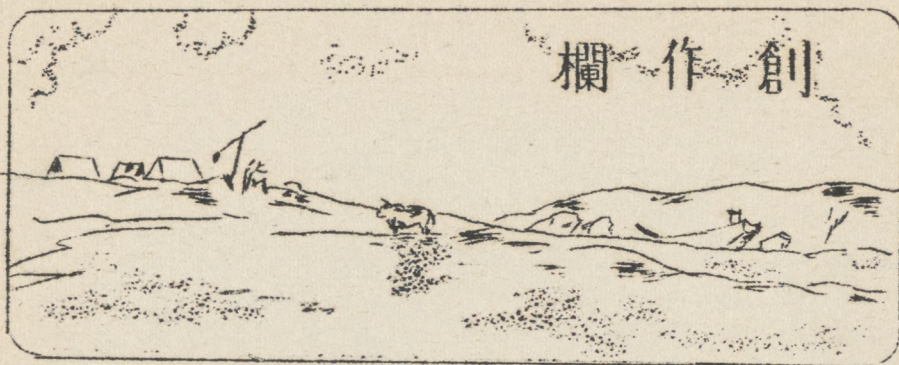
笑子

留二

縁小

梨生

欄 作 創



馬鹿庄

木 林 百 太 郎

先づ俺の六歳頃を振返る。六歳で俺は西から東へ（区カウの西を西、東を東と云つて一口に分つてゐた）移つた。西の母の家から東の父の家へ引き取られたのだ。遊び友達も變つたやうに、近所の人々もがらりと變つてしまつた。

母の家は隣近所が上品で旧家や商家商店であつたのに、父の家、つまり俺を育て、くれることにじつた伯父の家のことを訪すと、大体伯父の家が貧乏で百姓家だつた。東隣りが家大工さんで、向ひ側が船大工さんで、西隣りが船元（網持ち舟持ち）の工藏のある家だつた。向ひの船大工さんの家を一口に善

吉番匠と云った。この家は土地持・船元・大工といふ素封家であつた。西隣りは舟元だが、番匠さんのやうに鰯や鯉を獲るあぐり網といふ大網でひく、地曳網の持主だつた。それでも区で十五六番に廻る金持で、番匠さんは後に大々的に新築をして離れを作つて料理屋になつたが、西隣の舟元は昔から土蔵を持つてゐた。

俺の伯父が「兄さん」と呼ぶ人が主人で「亀太郎」と俺の伯父を呼んでゐた。その人は隣り区から婿に来た人だ。

或時、その妻たる家つきの小母さん（俺を可愛がつて呉れた人だ）が、一軒置いて西隣の馬力屋の馬の蹄に深股を切られて破傷風で急死してしまつた。その臨終の時の苦しみを俺は忘れることが出来ない。

その頃から俺にその長男庄太郎さんの馬鹿が眼に映じ出した。

庄太郎さんは皆かうシヨウタロさんとかシヨウタランと呼ばれた。のろ／＼歩くことを靜岡では「シヨタラン／＼歩く」と百姓がいふが、そのシヨタラン／＼と、庄太郎さんの呼名がよく似てゐる。シヨウタロハンからシヨウタランにひつた。わざと人がさう呼んだのだらう。

庄太郎さんには弟があつたが、パナマへ渡航してどうして北帰国しひいので、家督を馬鹿な庄太郎さんが継がひければひうむかつた。

庄太郎さんは暇ある毎に俺の家へ来て喋つてゐた。雨の日は俺の家の網屋へ若

い衆が五六人集つて、草履・安中草鞋を作る中に交つてゐた。お天氣の日は仕事の出かけや帰り時に俺の家に来た。

「百ちやん、え、歌覚えて来たよ。」

或時さう云つて俺に沢の歌を下手に歌つてくれた。因に彼の父親は踊りと歌の名人として宴会に引張り厭であつた。

一はと進上

わしやイチ(髪)を結はねど

役者なりやこそイチを結うてまほろ

わしやイチを結はねど

チヤンカラリンと帆を巻いた。

二はと進上

わしや庭掃かねど

お三ひりやこそ庭授いてまわろ

わしや庭授かねど

チヤンカラリンと帆を巻いた

こんな風に十まであつた。明治四十年頃から流行したものが、それとも昔からあつたものが知らない。

馬鹿庄とは彼の弟妹が激した時彼に与へる敬稱であつた。

彼の下には俺より十五許り多いおかんといふ余りはつとしむい頭の貧相な妹とセハツ多いおつるといふ頭も顔立ちも好い妹と、四つ半多い丈太郎といふ弟があつた。丈太郎と俺の従兄万太郎と同級生で隣り合せなので、従つて俺も丈太郎の指揮下に蟹取り、かじが取り、磯釣りに行つたり、用水や排水溝へ網を廻しに行つたりした。

もう一つ縁の深いことは、伯父が庄太郎さんの若い者入り（元服）の時の親分なのだった。それで庄太郎さんは伯父を兄さんと呼び、伯父が庄太郎さんの父を兄さんと呼ぶ理由がわかつた。

静岡の漁師町では親分は仔分の結婚の時に仲介者になる風習があつた。伯父は結局八回も庄太郎の仲人をした、それ程伯父は庄太郎さんの仲人に運が悪かつたと言つてゐた。

「添かのは嫌だ、どうでも私は嫌ですー」
と若い嫁さんが、仲人たる俺の家へ来て事件解決まで寝て出て行つた女を俺だけで四人は知つてゐる。

「何故庄太郎さんとこへ、嫁つ子さんが居ひいつて言ふだい？」

或時俺は伯父に尋ねたことがある。伯父は言下に

「庄太郎さんが馬鹿で相談相手にひらないつてさー！」と答へた。

八編目に伯父は庄太郎さんの仲人たることを拒つた。

「俺ぢやあ、どうも庄太郎さんの仲人運がないやうだから、一遍仲人を更へて見ては……」と言ふのが伯父の拒絶の理由だった。そして庄太郎の仲人即ち親分には直ぐ西隣りの同じく馬力持ち、馬力曳きとも言ふ作次郎さんがひつた。その作次郎さんの西隣りが庄太郎の母親を蹄にかけた馬の持主だ。

作次郎さんの親分にひつて慇々嫁さんが居着いた。

庄太郎さんが三十五にひつた時、当時回舎には珍しい石鹼の行商女が来た。興津在の小島といふ処の金持の長女だけれども、非常な悍婦であり醜女であつた。素封家の一つとして兄に立派な有衣を持ち、妹が後に俺の兄のアメリカ帰りと結婚した。も一人の妹に東京の辯護士と結婚してゐるのがあり―その家を東京で中学時代に訪ねたことがある。だしに深沢法学士とか言つて、回谷かどこか百人町か余丁町に住宅があつた。なごう、長女たるその女お作さんはひようついでゐたらしく、当時俺の眼には三十五に近い独身女であつた。

庄太郎さんの親父が

「うちの息子の嫁になつて呉れなにか？」と申し入れたら一も二もなく承知してその後正式に話が進められたらしい。とに角目出度く庄太郎もやうやくパナマへ行つたきりの、帰国する意志のない重次郎さんの心がハッキリした以上、片瀬權吉の後継者^{ウケトリ}片瀬庄太郎になることが出来た。

お作さんは朝から晩まで近所を訪問して生れた家の自慢を言つて歩いた。金持ちで田畑持ちであること、自分の兄弟姉妹が皆学面があること、下の二人の妹は夫々静岡の女学校を卒業したこと。一人は東京の辯護士と結婚してゐること等々。それだけであればよいが、俺の東隣^{トナリ}の家大王さんとこと親戚なのだが、そこのおいそさんと毎も口論した。おいそさんはお作さんの高慢を黙つて聞いてゐられないう性の小冊さんだった。お茶摘みの頃に三軒並んでお茶摘みをしてゐると、俺の家の畑を挟んで、おいそ、お作の口論かう、双方近寄つて俺の家の畑で取組み合つて喧嘩の段階に入つたこともある。おいそさんは年だし、お作さんは若い上に、体格が男のやうに大きくがっしりしてゐたので勝負は問題ではなかつた。悪いことはお作さんはいそさんが四十過ぎの小柄に子を背負つてゐるのも横はず押し倒すことだった。然し俺から見れば、喧嘩はおいそさんが買つて出る方だったし、劣つてゐる体格も年もたれて組付いて行つたのもおいそさんだった。

近所の者でお作さんと絶対に争ひをしらないのは俺の伯母だけだった。おとり伯母さんは、角力取りのやうに上にも横にも大きく、家では伯父や子供に対して口喧し屋で、音声の高い人だったが、甥たる俺と世面に対しては絶対に平和静穏な人だった。伯父は俺の亀さんと言はれた人だし、庄太郎さんはどうしても作次郎さんの所より、元の親分の所へ来てゐたやうに、お作さんも俺の家へばかり来てゐた。

「お作さんは新聞を取るさうだ」と言ふ噂が立つた。

お作さんは事実報知新聞を取つてゐたり、地方の民友新聞も取つたりした。だがやがて

「お作さんは新聞を逆さに読む」と言ふ噂が立つた。それはほんとだった。見栄で新聞を取ると言ふことは俺にしか知れなかつたことだ。

子供を孕んだ。さあお作さんの鏡舌には生れ来る子への愛情と、混合酒みたいには、やかましく夢が人々への放送となつて散つた。俺も

「わたし男の子が生れたら武男とつけて洋服で育てる。女の子が生れたら浪子とつけて縮緬、絹づくめで育てるだよ」と言ふ言葉を伺ふ處となく耳にタコせしめられたかしのやうい。その他お作さんの抱負は總体に大きく、人々は生れて来る子の幸福を嫉むよりも、その実現性を見物として注意してゐた。

生れた子は男で、お作さんの計恵通り武男と名づけ庄太郎さんが掌中の玉といつくしんだまではよかつたが、日を縁つた近所の観測婆さん達に言はせると、武男は「エ産つ子」だと言ふ。さあその話で持切ろやうになつた。おいそさんは庄太郎さんが俺の家へ来るのを待つてゐて、

「お前が馬鹿だから……あれはお前の子だもんが！」と言つた果は「恥知らず、胴鈍^{ロム}奴^マ！」と言つて叱つた。庄太郎さんはたゞニコ／＼笑つて聞いてゐた。

その話題は十歳位あの子供まで口にした。

「百ちやん、あんたの伯父さんが貴ひ風呂に行つたら、確吉さんとお作さんが一緒に湯に入つてゐたつてよ。」とか「武男はエ産つ子ぢやひい、あれは庄太郎さんの弟だい、確吉ッあんの子胤^イだーい。」とか「何でも庄太郎さんがあの方が利かひいから、嫁を逃がさないように親が子の代りとしてゐるさうだ。」とか、さうした言葉と以て遠くの年長の児童共が、隣りに住んでゐる俺に確證を求めて来るので年足らずの俺は人情を見納めた訳ではなし困つたものだ。

お作さんの眼の中へ入れても痛くない武男は「不如帰」の武男さんにあやかつたものであらうが、小学校へ入学する頃になつても一向美男子になりさうな傾向が見えぬどころか、その顔付は狡猾とおつちよこちよいの風貌を混じて備へ、物言ひは頭の悪さを示した。洋服で育てないのみか、区の畑二反歩もない貧乏人の

子供よりひどい見苦しい態をしてゐた。武男が並外れた悪戯坊主だつたからである。後に大失傷の爲に身体中に傷が出来て「地団」と綽名されるまでは、その頭の恰好によつて「アツキヨト」と呼ばれてゐた。珍しい武男の特徴は眉毛の薄いことだつた。

お作さんは新聞購読を止めた。

世間には山から密柑を運び出す時、自分の横取り収入にしてゐるといふ噂と、その爲の共謀者に匹の貧乏人の子供の多い男と情的にも通じてゐて、その男を利用してゐるといふ噂も立つた。

俺が東京から帰省する冬休は密柑時、夏休みは梨時なので、俺に内緒で手紙を委託販賣店に出すやう代筆と依頼にまけた。それで俺にのみはお作さんの無筆と山の産物のかすの取りが知れてゐた。だから俺には町噂である上に「坊ちゃん今日はこれを……」と言つて色々の果物を持つて来た。土地柄だけあつて産物は豊富だつた。しかも網持ちだから新鮮な魚類を何時も持つて来た。伯父は毎北「百太郎、決してお作さんの横取りを他人に言ひなよ」と俺に注意した。多分伯父はお作さんの復讐を慮れたのだらう。そんなことより俺にもつとも滑稽なことは、俺に内緒の代筆と依頼にまては、机の上の書物を見るなり

「まあ百ちゃんはおくづすこと」と嘆息を上げることだつた。俺は当時楷書はか

リ書いてゐた。それをくづすこと！と言ふ。そして字をくづして書く人が立派な學者だと思ふ昔の田舎臭い考へから、褒めたつもりで言つたのだらう。笑ふことも出来ない苦しい程訴しかつたものだ。

或時、一番末の妹だといふ牧江といふ県立女学校を卒業したばかりの美しい人が来た。

「百ちゃんは中学生だから、中学生は女学生と遊ぶんですよ」と言つて、十九にもなるその牧江さんと十五の俺とを何でも無理に遊ばさうとしたことがある。そのことは兎に角として「このお作さんにもこんな美しい妹があるかしら」と疑つた程牧江さんは美人だつた。

庄太郎さんが肺病で死んだ。庄太郎さんは肺病の爲の無造病者であつたのだらうか、毎も神隠しに逢つたり狐に欺されてゐた。田舎の漁師や百姓の迷信で云へば神隠しや狐に欺されたことにするのだらうが、俺は彼が貧血症か、又は夢遊病者だつたらうと思ふ。庄太郎さんは、学究的に言へばフロイドの精神分析にでも任さなければならぬやうな神話、逸話の原泉であつた。その人も死んだ。

それからのお作さんは、俺の目にも公然と権吉ッあんといふ舅と夫婦関係に入つた。

権吉ッあんも弱り出した。弱りながらせつせと仕事をした。益々弱つて行つた。

俺が歩兵聯隊から除隊して来た時のことだ。

「うちのぢいさんが居なくなつた」と言つてお作さんが騒いで探し廻つた。近くの山や谷を探してゐた。午後三時頃から近所や親戚が總出て探すやうになつた。お作さんはおろ／＼泣かんばかりであつたかと思ふと、

「畜生……い、年をして、何処へ仕事に行つたか……」朝飯を喰いで出て行つたきり……と口汚く罵つたりした。

午後五時頃近所の人によつて、お作さんが探した山の手とは反対の溪の畑、つまり汽車道の南側の畑に喰つてゐる権吉ッあんが発見されて家へ連れ込まれた。まだ息があつた。権吉ッあんにこの事あるを知つて居る親族が枕元で尋ねた結果、色々お作さんの悪が露見した。

先づ親と嫁との関係はお作さんから強ひられてゐたこと。次に丈太郎さんに半分、バナマに居る重次郎さんに半分遺産相続させる心算りでゐたのに、お作さんと、近くに嫁に来てゐる妹及びそのアメリカ刀帰りの夫との三人に賣められて、全財産、不動産を武男の名義に替へてしまつたこと。次には、その日は嫌がる権吉ッあんをして朝から仕事へ行けと押し出したこと及び、溪の畑へ行くやうに命じたこと。つまり言へばお作さんは権吉ッあん謀殺に取りかゝつてゐたわけだ。

権吉ッあんの見のある中に、親族会議が開かれ、お作さんと、その妹夫婦を召

還して訊問し、結果として、帰国の意志の強い重次郎さんへてなく、分家してゐるえん郎さんに半分、武男に半分といふ財産の分け方を決した。

権吉爺さんのお葬式は、俺の田舎の風習に従つて、向ふ三軒兩隣りが葬送の人が待つ爲、控へる爲の場所に供される。とり分け兩隣りはお精進料理の準備と饗宴應の場所として使われる。で、俺の家はその兩隣りの一つとして用ひられたのだから、その賑かさは一通りでひいに、葬式される家に特種の物語りがあるので、人の死んだ悲愁さ口こもつてゐひかつた。近所は勿論、遠縁の女達は一寸した着物を着て、袴^{はかま}かけて食膳の用意をしてゐた。野菜物の切り刻み、洗ひ物、煮物で音と勾の交響樂だった。

「百ちやんも見に行つて来びさい」といふ。
「何があるの？」と言ふと

俺も行つて見た。成程あつた。だがその紙に書かれたものは実験しないのだが、
槌かだと抜いて紙を叩いた人の話だ。お作さんは、誰も気がつくまいと多寡を括
つてゐたのか、それとも家庭で一人死んだとさくさに忘れてしまつてゐたのか。
その頃隣りのおいそさんが生きてゐたら、それに因して、親戚である奥係から
面白い辛辣な批評と悪罵が加へられたことであらう。知能や理性の人々の家庭程
葬式の時特別に親類縁者から文句喧嘩が出て来ることを俺は知つてゐた。

お作さんの一粒種、それは歴然と庄太郎さんの子ではなく、又工産子でもなく、
工割以上の定評に近い判断では権吉ぢいさんの子であるといふことになつた武男
は、学校の成績は最劣等、しかも学校へ行くのを嫌ふ上に、たまに登校すれば先
生を手古すらせ、同輩とは喧嘩ばかりし、その上に多分にオツチヨコチヨイである
といふことになつて、火傷の創跡に因む「地團」といふ綽名で町中有名な悪童にな
つた。俺が渡米する頃にはもう年頃になつてゐたが、中学へも行かひかつたし、
行けさうな頭を持ち合はしてゐないことは慥かだつた。一つ面白いことは馬鹿庄
の子の馬鹿武が、親かどうか知らないが、親のやうに誰よりも馬鹿であるのにな
いや馬鹿だからかどうか、人々にかうかかれてゐるのも知らないので、人んびた、
むづかしい漁や天候の話しをもつともらしく話してゐるその顔つきだつた。

武男は俺の渡米の頃は、お作さんでも手に負へず、区の青年団や青年団長や、

巡査の手を焼かしてゐた。今頃三十歳だと思ふがどんび人面になつてゐるだらうか。

サンピードロ、ウイルミントン、ターミナル島に居る時、メキシコ近海やアカプルコ辺へ漁に行く人があつて、隣りの重次郎さんがバナマで床屋さんをしてゐる話を聞いたことがある。又、或漁師を訪ねた碇泊中のアメリカ汽船のクックさんたるフイリツピン人の口からその床屋の話をよく聞く聞いたことがある。カタリノジエジロ、カタセと言つてゐる床屋さんで、工人を妻にしてゐるとかいふことだつた。その当人がどうか……日本へ帰られない事情……どうもさうらしい。

さうした悲劇的末路を持つ家と、その親戚であるおいそさんの家は、俺の育つた家を兩狭みにしてゐた。俺の家は地理的にも緩衝地帯であつたが、精神的にも伯父伯母その他誰でも、喧嘩口論が常習となつてゐる半漁半農の町として日争ひを好まない緩衝地帯であつた。おいそさんは子福者であつたが、長男は欧州航路、貨物船の火夫になつて、印度洋で死んだ。二男は何とも分らずに死んだ。三男は大工さんで、俺と同年の四男に大工の技術を授けた頃に、裏山の高圧線へ、竹竿に針金を仕掛けて、死んでから片づける人に感電する迷惑をかけないやうに、雪の仕掛をして黒焦げになり、精神者の悩みを解決した。四男は俺と同年だと言つた男で、これ一人が丈夫に大工をしてゐるが、渡米の時

「百ちやんの家を建てさして貰ふよー」と楽しんで呉れてゐた。

この呪はれた兩隣り口、魔につかれてゐたのだらうといふことを、不気味ながら感じられることがあつた。この兩隣りと俺の家とが並んでゐることは、裏の畑まで屋敷の延長として並んでゐることを意味してゐた。処が、この屋敷から裏の畑の境がつい問題なのだつた。この兩隣りが段々侵入して来る。昔は一直線であつたものが、田の境石だけは流石懸難な兩家も動かせず、で、石だけはその儘で人の屋敷内へ切り込んでゐるので、一目瞭然とめり込んだのが分るやうになつて居た。先祖は伯父のやうに佛様ばかり居なかつたと見えて、争つて兩家の地図と森家の地図とを南き、役場の測量師が立合つて、兩家を凹ましたことがあるさうな。静岡でも俺の地だけの習慣かどうか、地祇として「地の神様」を祀るが、その地の神様が兩家の畑の中にあることは土地の人々には直ぐ様「神様を動かせず、地面だけは侵したのだ」と分ることだつた。

伯父は、俺や、從兄が督して、兩家とのことで一肉着起さうとすると、毎も穩かに言つた。

「罰は天が与て、くれうあー」

どうしてかと聞くと

「屋敷といふものは、人一人寝返り、打つ程侵略つたら一人、二人分侵略つたら

二人死ぬもんじといふから……」と、ニコリともせずにつてゐた。

俺は東京の中学へ行く血の氣の最も多い頃、四つ年上の従兄、即ち伯父の長男と二人で、兩家への天刑天罰を待つて居られなかつた。だが伯父は勝つに決つてゐる係争を起させなかつた。

馬鹿庄の家に当り前の死方をしたものの事いこと、その親戚のおいそさんの家の若死は、數へたら、その人数だけが寝返りする程家數を兩家で侵略してゐたのかどうか知らないが、俺の土地ではこの兩家の土地侵略と家庭悲劇と「龜さんの辛抱」即ち俺の父の兄の穩和さとを連繫して当時誰知らの者はなかつた。恐ろしい因縁談のやうである。

(終)



影と蔭

藤田 晃

みねは近い内に催される展覧会に出品する今日の
人形の顔や着付を直してゐた。

キヤンプに入ると向もななく夫が植えたキヤスタ
ービーズが今では殆どバラツクの屋根の高さにま
で成長して九月の陽を遮り、みねの坐つてゐるベ
ンチの周囲に広い蔭を作つてゐた。

キヤンプに入つた時には灰のやうに浮つてゐ
る砂の上に躍る光線がいたく眼に滲みだが、月日
の経過と人の汗はそれを踏み固め、黒々とした土
壌には花が咲き実が実つた。隣のバラツクの前に

ある池のほとりに伸びたカットン・ツリーの葉の青さが生々しい新鮮さを見ねの胸に与へてゐた。

仕事の手を動かしながらみねは、娘の芙美が悪愛してゐると、さう思ふだけで微笑ましい気持ちになるのだった。

芙美の姉の登志の悪愛の場合には、キヤンプ内に於ける若い男女の交際に何となく危なさを感じて、それとなく登志に注意してやつたこともあったが、芙美の悪愛に關しては、悪愛の裏を詮索する母親らしい気の配り方に慣れてしまつた爲め、芙美の悪愛に対する世間の風評が少しも気に懸らなかつたばかりか、どちらかといへば、さうした人達に娘の悪愛を喜んでゐる自分の気持ちを公然と知らしてやりたがつた。

登志はこれといった特徴のある容貌で、口が小さかつたが、顔の輪郭が美しく整つてゐたし、性格そのものにも人さしきつける明るさに充たされてゐた。芙美はこれが登志の姉妹かと思はれる程色が黒く、容貌も見劣りがした。殊にアリゾナのこのキヤンプに住むやうにひつてから余計に黒さが増してゐるやうな気がして、本人は案外無恥着であるのに、母親のみねは妙に気になつたりした。たゞ芙美が笑ふ時には肩の兩端に年似合口ひえくぼが浮ひ、綻び出る八重齒と共に愛くるしい表情を表現したし、健やかに伸びて整つた股体は日本人には珍しかった。時折ブラツクの人達が、芙美の健康さうな肉体を羨むることがあつたが、さうい

小時にはみね何時も「あの娘は生れた時の貴目^{メケ}が凡^{ソコ}もあつたんですよ」と、自分の手柄のやうに云ひ、芙美の秀でた肉体の美しさを自分自身承認してしまふのだつた。

芙美はさうした女性的に秀でた肢體を持ちながら、それが眼について若い男達からちやほやされるといふやうなこともなかつた。十人並の顔をした娘達^{メケ}が、^{メケ}お化粧をして持て前の愛嬌の良さから、若い男達の胸にそれ相應の存在を示してゐるのを見ると、芙美も人並にお洒落をして、もつと愛想のある口の利き方をしたら良いのにと思ふこともあつた。それが母親としての正しい愛情ではひいと意識しながらも、やはりそれを期待する甘さはみねの心から仲々抜けきらなかつた。

近頃では、女性の美しさは容貌よりも健康美に輝く肉體にあるのだと、雑誌で讀んだり、人に聞かされたりして、成程そんなものかなと、不図娘の芙美の肢體を思ひ浮べて、芙美の爲に喜んだりしたが、芙美の肢體の持つ美しさを慕つて見る者がない所を見ると、世間の若い人達は、やはり普通の日本人以上の男まさりのする肉體には圧倒され勝てず、表看板の美しさに牽かされるのが当たり前だと、三十前も前の自分達の結婚のことが思ひ出された。

その当時、米国移民の間には眞結婚が流行して、みねもその方法を踏んで現在の夫と結婚した。今考へて見ると随分乱暴なことをしたものだと思ひひいても

ひく。キヤンプへ入つてから夫や娘達とそのことを話して笑つたりしたが、幸ひ夫が実直で善良な人間であつたので、戦争にしろまで三十年のアメリカ生活を案外幸福に暮すことが出来、今でももう三人の娘も成長して、彼女達の結婚のこゝでも考へてやる以外にこれといつた心配があるわけでもなかつた。キヤンプの人達がキヤンプ生活や戦争のことで、ブツ／＼と不平を並べ立て、ある姿を見ると、とにかくも境遇に沿つてそれ相應の満足を感じながら過すことの出来る自分をほんとに幸福だと思つた。みねに幸福を齎してくれた夫——みねは自分の良い意味での順應性に富んだ性格が生活の安定感を与へてくれるのだといふことを少しも考へたこともなく、夫が自分に恵んでくれたものであると只一因にさう考へてゐた。——が寫眞紹介の後に米国の或埠頭で自分と初対面した時「みねさんといつたね。寫眞で見ると、とても大きい女のやうに見えて心配になつたがそんなでもないんだね」と云つて笑つた時のことを考へると、夫もやはり夫自身よりも優れた肉体を持つ女性を希望してゐるなかつたのだと、美名の肉体の健やかさが却つて禍にまつてゐるやうに思はれをかしなところで内々口自慢してみたい美名の股体の美を否定してみることゝあつた。

キヤンプ内の風紀について嘘か眞実が分らないやうに色々な噂を耳にする度に、みねは娘達が地味な生活をして呉れるやうに望みながらも、やはり心の何処かで彼女達の生活に或華やかさを持たせてやりたいと希小意識の潜在は妙なものだ

と思つた。殊に姉の登志の悪愛が結婚談まで進みながら、相手方の家庭的な一因から悪愛以後を成就することの出来なかつた悲しみを思ふと、後の二人の娘達の交際を慎重に監視してやうしなければならぬ母親としての位置をつくづくと感じるのであつたが、三女の容子は交際に相対的な意識を感じるには少々無邪氣過ぎたし、美美には若い男性との面これといつた交際があるやうにも見えなかつたので、みねはこの二人の娘達に口今のところ自分の氣を疲らせる心配がなかつた安心してゐた。然し容子は別として、美美の案外ノ不本とした態度に慣れてくると、先に覺えた娘達への安堵は影をひそめ、美美の女らしい技巧を弄さぬ無関心さや、二十ニといふ年齢に似合はぬ地味っぱい服装がみね心をいらくさせるのだつた。時にはそれとなく遠廻しに云つてやううと思ふこともあつたが日本人らしい世間並の母親としての心理がそれを拒んだ。

そんなみねであつたから、美美が天と一緒にメスホールに働いてゐる日野と親しさを加へて行くことがたよりなく嬉しかつた。読書好きの日野は、これも又読書家である夫が外部に委託してあつた書籍を取寄せたのを機会に時々みねの家庭を訪づれるやうになつたのが美美達の交際の始まりであつた。日野は戦争直前に父を失ひキヤンプに転住して一年後に母を亡くした。日本から帰來した日野が親との間の情愛を育まざうと努力してゐる様子が母と水入らずのキヤンプ生活によく窺へた。みねはそんな日野の氣持に痛々しいまでに同情の念の湧くこともあつ

た。

人形の顔を作つてゐるみねの手許に急に黒い影が落ちて来たので手を休め、眸を上げると、日野がケツチンのエプロンをかけたまま、立つてゐた。日野の姿は何となくやさしさの感じをよへ、W.R.A.のケツチン用のエプロンはぐるりと腰を巻いてしまひさうだった。近くで見ればそれ程でもなく、寧ろ筋肉の引きしまった肉體がなまむ弾力の強さがあり、一種の不可解な魅力が日野の肉體から生れてゐるやうに見えた。背丈は芙美より一寸位高は高く見えた。みねは芙美がハイヒールをばいた時のことをも想つたりした。

みねが、日野と芙美との交際を恋愛といふ立場から考へるやうになつたのは、芙美が解きほぐした毛糸の絡んだのを日野が辛棒強くほぐしてやつた晩からであつた。それ迄日野と芙美は一緒に映画を見に出かけたリ、クレーターの前や蔭のあるベンチで話したりしてゐたがみねは二人の間に特別の感情が育まれてゐると思つてもみよかつた。その晩芙美は編みかけのスターが巧く出来まいといふのでいろいろした拳句に無難作にはどいてしまつたが、解の毛糸は始末がつかないやうに絡んでしまつた。日野は傍で芙美の様子を見詰のりながら「不細工だらう」と呟き、絡んだ毛糸の解き方に掛るのだつた。二人はそれを解きほぐすのに二時面も掛つた。みねは蒼白い光の下でもつれ合ふ二人の指の動きを見詰のりながら、芙美と日野の聴いてゐたが、みね程の年齢の者にはくすぐつた、響く甘い感情の

感れがなく、沈潜した情熱の流みが二人の間に静かに横たはつてゐた。みわは「残菊物語」と言ふ映画の中の一場面に丁度これに似た雰囲気を持つた場面があったと、古い日本映画のストーリーを思ひ出さうと記憶の糸をたぐつて見たリした。あの映画では恵中の人物が演技といふものを意識し、いつて眞実の人間になり切つてゐるやうに見えるが、芙美達の場合でも二人がこの上もなく近くお互ひの眞実に觸れ合つて居ればこそあつた、落ち着いた、透明な情熱の世界に浸ることが出来るのだと思つた。芙美と日野とはもう自分達の想像の範圍を越えて二人だけの世界に住んでゐるのかもしれないと交互に二人の顔を見交してみるのだった。どつちやら毛糸を解きほぐすと、日野は芙美の手を握り「フワ〜」と溜息をついた。芙美は薄く描いたルージュの陰から白い齒を出したが眸は笑つてゐるかつた。光線のためか芙美の指の白さが印象的だった。

みわはベンチの上に散らがつた布片や絵具を掻き集め日野の爲に空席を作つてやつた。日野は額の汗を拭ひ、エプロンを外すと、手を自分の鼻に当て、今度はその手をみわの鼻の先に持つて行き、

「くさいでせう」と顔をしかめた。

みわも顔をしかめて日野の手から顔を斥けて

「いやな鼻ひ！魚ね」

「さう、シャークです」

「シャーク？」

「鮫ですよ御馳走でせう」。

「喰べられるのそんなもの？」

「さうでせう、喰べられるものをメスへ持つて来る筈はありませんからわ」。

「いやね……」

みねはシャークが食用にしろといふことを信じられずいらしく唇を歪めた。左の眼が細んで日野が今迄知らなかった表情を生んだ。

日野は黙つてみねの顔から人形の顔に視線と移して微笑^{ゆわ}つた。みねは日野の微笑が氣になつて

「どうしたの？、そんなにをかしい、この人形の顔？」

日野は首を横に振つた。みねは人形の顔を見直してゐた。

日野はみねの人形の顔の粉飾が下手だとは思ひがかった。繊細な眉毛の描き方や頬のふくよかさの表現にみねらしい器用さが窺へた。だが日野はみねの素人扱ひのした器用さを感じするよりも、人形造りを心から楽しんでゐる氣持がそのまゝ、日野に伝はつて来て、一面子供のやうな素直さを持つてゐるみねの性格に共感し、母親といふ世間並の落着きを得た年齢に達しはしたものの、恋愛する情熱がみねの感情の中に潜んでゐるかもしれないと、いひ知れの魅力を探つてゐたやうな氣がするのだつたが、母親としてのみねにそんな感情を期待することにすまひさを感じ

じ、視線を人形の顔に移して微笑つたのだが、みねはみねで日野は人形造りには素人の拙い投藝を笑つてゐるのだと思つた。日野には人の真面目な気持を笑うより輕卒^{シブ}さは見られなければ、現在のやうに家庭的に親密になつては兎^{ウサギ}兎^{ウサギ}のやい冗談な振舞ひも有り勝ちだと、みねは日野の態度が氣にならなかつたばかりか、日野から正直に自分の拙さを指摘して貰へたら、絵の方では日本で美術学校に在學してゐたことがあるといふ日野のことであるから自分などには大いに勉強になるとさへ思ふのだつた。

(つづく)

原稿 募集

論説

創作

隨筆

詩

短歌

俳句

川柳

宛名

藤田

晃

316—D

橋本京詩

314—H

編輯 後記

▲日本でいふ梅雨に似たしがない雨が上ると、思ひ出したやうな

暑さがツール・レーキの藝商をぐる／＼と巡り出した。

▲ホストンやヒラから来た人々でもやはり暑に暑いと云つて陰を求めて歩いてゐる。人相なんて結局氣持の持ち方一つでどうにでもひりさうだ。

▲この度の怒濤奔行の爲随分無理に仕事をしたが別段苦痛を感じなかった。然し仕事の間が見え出すと一時に疲れを覚えた。
▲この度の原稿は長文のものが多く編輯に苦勞した。頂いた原稿は出来るだけ掲載したいと思つてゐるが、製本の都合で約百二十頁を限度としてゐる故、其点諸賢の御諒解を乞ふ次第である。

昭和二十年六月十八日 印刷
昭和二十年六月二十二日 発行

編輯

藤田 晃
橋本 京詩

印刷・発行

鶴嶺湖男女青年團

